

「特別の教科 道徳」

研究主題 豊かな心もち よりよく生きようとする児童の育成
対話を通して考えを深める道徳授業の工夫

主題設定の理由

1 児童の課題

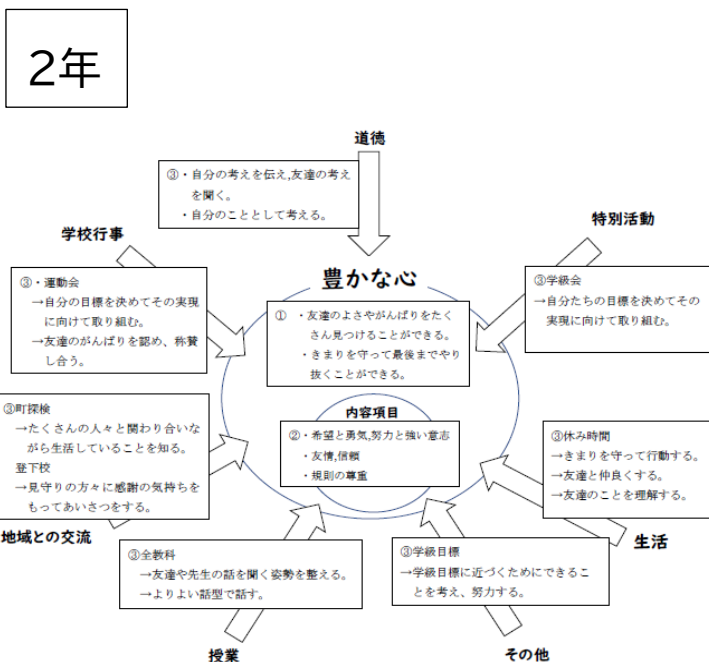
- ・自己肯定感が低いという傾向がある
- ・自分の思いを伝えることが苦手な児童が多い。
- ・思いやりのある児童が多い反面、相手の気持ちを考えないで行動する児童がいる。

2 教師の願い

- ・自分に自信を持つ児童。
- ・自分の思いや願いを表現できる児童。
- ・違いを認め、思いやりのある児童。

↓

「豊かな心」の育成
を目指すことで育てていく。



3 研究の柱

- ① 豊かな心の育成を、全教育活動を通して行う。
(構想図の作成 2年生の例)
- ② 豊かな心を育成する柱として、道徳科を位置付ける。道徳の授業では「対話を通して考えを深め」ていく。
※対話には「教材との対話」「他者との対話」「自己との対話」がある。



4「対話を通して考えを深める」道徳授業を行うための研究の視点

- ① 道徳的価値の明確化
- ② 問い返し
- ③ 思考ツール
- ④ 振り返り



1 道徳的価値の明確化

授業では、主題やねらいをしっかりと設定する必要がある。学習指導要領と道徳の教材の重なる部分を見つけ、それに児童の実態をかけ合わせることで道徳的価値を捉えることができる。これを授業者が明確に持つことで、問い返し、思考ツール(板書)、振り返りをどのようにするか考えることができる。

2 問い返し

問い返しは本時で考えさせたい道徳的価値に迫るもの。主発問で子どもたちに考える視点を与える。その後問い返し(補助発問)をすることでより深い部分を考えることができる。

《問い返しの効果》

① 曖昧な表現を詳しくさせる

◎子どもの発言に対して

考えた理由が知りたい時
「どうして？」

行動した対象を確認したい時
「誰に？」

感情を明確にする必要がある時
「どんな気持ち？」

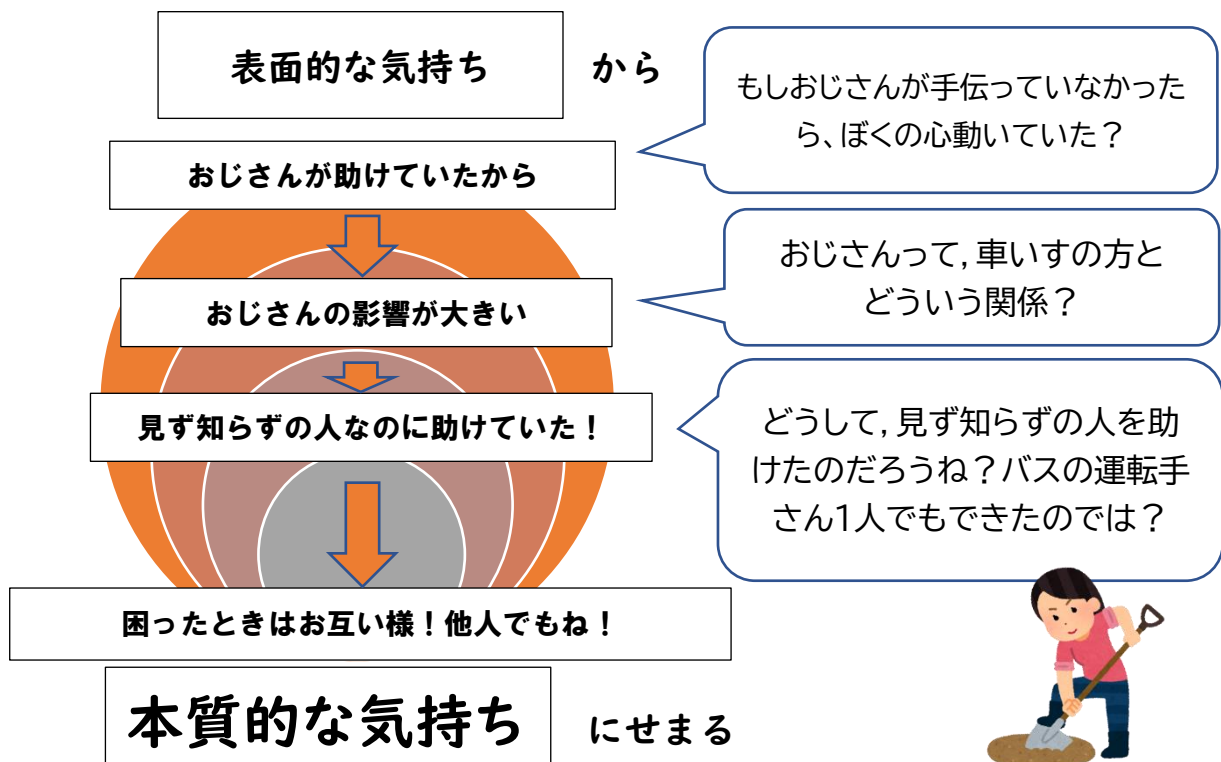
行動の必要性を問いたい時
「〇〇は何のためにしたと思う？」

より具体的に確認したい時
「くわしく教えて！」



② 表面的な気持ちの内側に隠された本質的な気持ちを引き出す

◎発問: ぼくの気持ちはどうして変わったのでしょうか。



3思考ツール

子どもたちの考えたことを「見える化」し、考えることを助けてくれる道

◇思考ツール

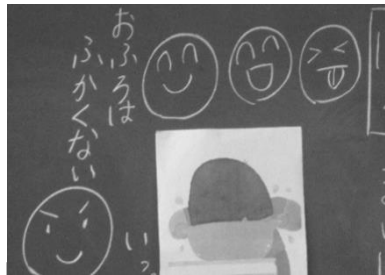
子どもたちの考えたことを「見える化」し、考えることを助けてくれる道具
『心情メーター』『顔マーク』『心のものさし』『帽子の色』…
考えの見える化にはタブレットが効果的である。

◎見える化をすることで子どもの発言が増える。→どのように自分の考えを言えば良いかということが明確になる。→さらに思考が深まる。



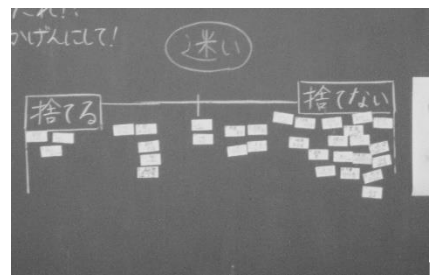
心情メーター

揺れ動く気持ちを可視化し、友達の内面の気持ちの動きをたしかめられる。



顔マーク

気持ちを顔の表情に表すことで可視化し、その心の動きをたしかめられる。



葛藤型

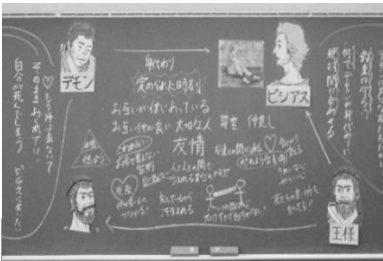
中心発問で主人公の葛藤を問い、2つの選択肢で考える。最終的には選んだ理由を考える。

◇構造的な板書

◎構造的な板書で子どもの発言が増える。

→図や表、写真や矢印などを効果的に用いて、子どもの考えや気づきを構造的にまとめながら思考に沿った流れのある板書を手がかりに考えられるから。板書から対話が生まれる。

◎板書例



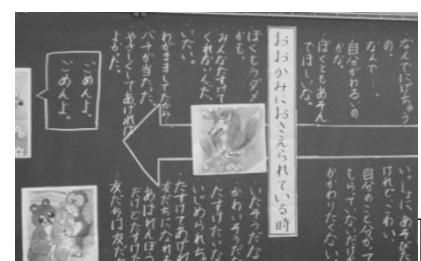
比較型

子どもたちの言葉を比べることで、その関係性から様々な



イメージマップ型

たくさん意見を出して拡散し、共通項を見出す。



対比

いくつかの視点で考えたことを書き出すことで多面的に見ることができる。

4振り返り

道徳の振り返りとは⇒ 自己を見つめること＝自分の心を見つめること
＝教材から離れて自分のことを考えさせる

振り返りの課題

- ・子どもの手がとまる。
- ・「～が大切だと思った。」等の授業をしなくてもかけそうな内容。
- ・「何を書けばいいんですか？」という質問。

そのために

○何を「振り返り」させたいのか明確にする。

- ①授業の内容を振り返る。
- ②今までの自分の経験を振り返る。
- ③道徳的価値について考える。

→ア、授業前に今日のテーマについての自分の考えを書く。

イ、今日の話合いのテーマを書く。

ウ、授業後にもう一度今日のテーマについての自分の考えを書く。

○「振り返り」の方法を選択できるようにする。

豊かな心を育むための他の取り組み

毎日行う縦割り班清掃



地域の方々との世代間交流会



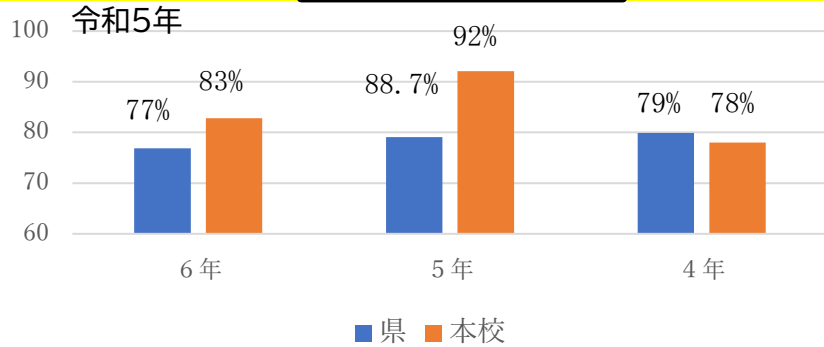
ボランティアさんの読み聞かせ



成果と課題

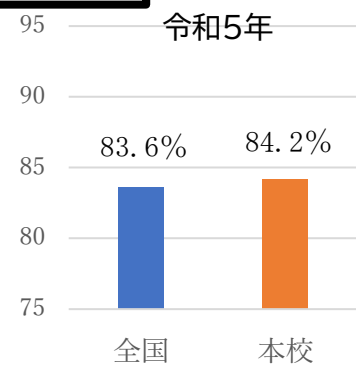
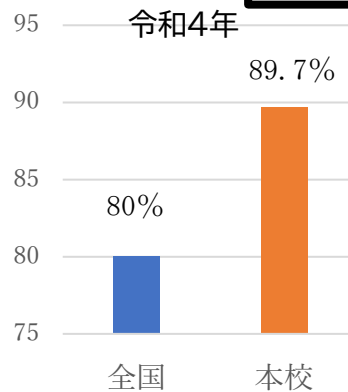
埼玉県学力学習状況調査

○自分には
よいところがあると
思いますか。



全国学力・学習状況調査

○道徳の授業では、
考えを深めたり、話し合
ったりする活動に取り組
んでいますか。



- 道徳を楽しみにしている児童が増えた。
- 道徳の授業で学んだことが、子ども達の会話の中で話題にあがるようになった。
- 1時間の重みを自覚し、大切にに取り組むようになった。
- 道徳の授業でのタブレットの活用が他教科でもできるようになった。
- ねらいの立て方や主発問・問い返しの工夫など授業作りの基礎を学ぶことができた。
- 上辺のきれいごとを言うだけでなく、弱い心(人間理解)に向き合える子が増えた。
- 子ども達ならどう考えるか、と予想しながら授業を考えことができるようになった。
- 思考ツール(板書等)を活用して子どもの考えを引き出せるように意識するようになってきた。
- 他教科でも話し合いを取り入れることが増え、少しずつ子ども同士で話し合いができるようになってきた。
- ▲子どもの心の弱い所やずるい所、自己中心的な所をさらにうまく引き出して、授業を展開できるようにしたい。
- ▲クラス内の道徳掲示をさらに充実させたい。

研究主題

一人もとりこぼさず、だれもがわかる・できる授業づくり



～国語科「読む」領域を通して～

入間市立新久小学校

1 主題設定の理由

埼玉県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査において、本校の児童の学力は全国、県、市の平均よりどの教科でも下回っており、クラス内の学力差が大きい。また、個別支援を必要としている児童も多く、授業に参加できない児童もいた。

そこで、全教科の土台となる国語科に絞り、全児童がわかる・できる授業づくりをめざして、教員のさらなる授業力向上を図りたいと考え本研究主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 研究仮説

全児童が授業に参加するための工夫をすることで、一人もとりこぼさずだれもがわかる・できる授業づくりができるであろう。

(2) 目指す児童の姿

- ・全児童が、授業に参加できるようになる。
- ・主体的に授業に参加する児童が増える。

(3) 手立て

①授業の焦点化

- ・その単元で学ばせる指導重点事項を一つに絞り、授業の焦点化を図り、児童が授業を理解しやすくする。

②児童の実態把握

- ・前学年での指導事項、指導内容、児童の様子・理解度の把握をする。
- ・単元テストや学力テストによる理解度、苦手な事項の把握をする。

③学び合い

- ・学び合いの場を設定し学び合いを通して、全員が授業に参加できるようにする。
- ・児童の実態に合わせた学び合いの仕方にする。

④授業のUD化

- ・ICTを活用した授業を行う。
- ・単元の流れ、1時間の授業の流れがわかる掲示や板書をする。
- ・ICTを使った配慮を要する児童への支援をする。

⑤授業のふり返りの充実

- ・この時間で(この学習で)何を学んだかをふり返る。
- ・この学習を通して、何ができたようになったかをふり返る。

⑥授業時間以外の活用

- ・読書活動の推進、充実をする。
- ・家庭学習で、自主学習に取り組む。
- ・詩等の暗唱に取り組む

(4) 具体的な取組

①授業の焦点化

・その単元で学ばせる指導事項を1つにしぼり、児童が授業を理解しやすくした。

C 読むこと	(小)第1学年及び第2学年	(小)第3学年及び第4学年	(小)第5学年及び第6学年
	(1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。		
構造と内容の把握	時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。 イ 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること。	ア 段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。 イ 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。	ア 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、支章全体の構成を握って要旨を把握すること。 イ 登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えること。
精査・解釈	文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。	ウ 目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約すること。 エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。	ウ 目的を... 【例】3年「モチモチの木はC 読むこと(1)カを重点に授業を展開しよう。
考えの形成	文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつこと。	オ 文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。	オ ...を... オ ...を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。
共有	カ 文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること。	カ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。	カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。

②児童の実態把握



5年の「生き物は円柱」では...

- ・単学級が多い小規模校であることを生かし、前学年での指導内容、児童の様子や理解度を情報共有し、指導計画を立案した。
- ・学力テストや単元テストで理解度やつまづきそうな内容を把握し、指導計画立案に生かした。

③学び合い

・さまざまな学び合いの場を設定し、学び合いを通して全員が参加できるようにした。

教材と



ペアで



低学年

グループで



座席の工夫



中・高学年

学び合いがしやすいよう
クラス全体をコの字型に
したり、人数や机の配置
を工夫したりした。

特別支援学級では、一人
一人の意見を吸い上げる
ため教師もグループに
入り学び合いを行った。



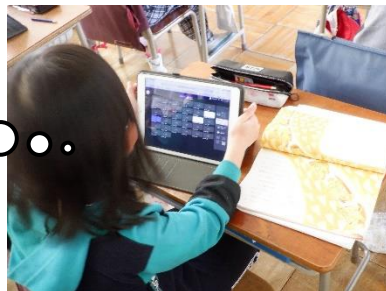
特別支援学級

教師の言葉や板書から



タブレットから

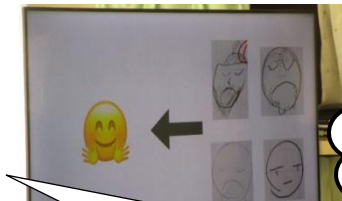
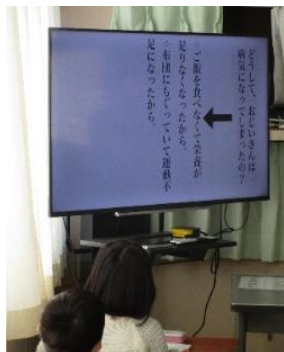
他の子はどんな
考えかな。



すごい。ほんとうに
はまぐりは、すばやく
かくれるんだ。

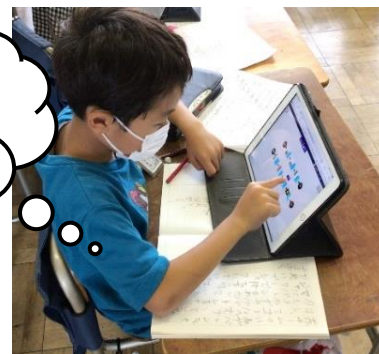
④授業のUD化

ICTの活用 ・授業の導入として、ICTを使って前時の児童のふり返りを提示したり、時間の順序を考える学習で児童が直感的に操作し、思考の手助けとしたりした。また、本文に線を引いて考えさせたい学習では、教科書に線を引くのではなく、タブレット上の本文に線を引くことで、間違えてもすぐ消すことができ、どの児童も躊躇なく、線を引く活動ができた。



3年とうげで転んだおじいさんはどのように元気になったのかな。

このたんぽぽは何番目かな。



モチモチの木を読んで最初の豆太と最後の豆太を比べたいと思った人がいますね。



トラックのつくりはどこにかいてあるかな。

ワークシートの活用

・全文シートを使用し、文の構成や大事な言葉を見やすくし、主人公の気持ちの読み取りや筆者の意見の要約の手助けとした。



個に応じた支援

・配慮を要する児童には個別のワークシートを用意し授業に臨みやすくしたり、パーテーションで場を区切り、集中しやすくしたりした。



通常学級での支援



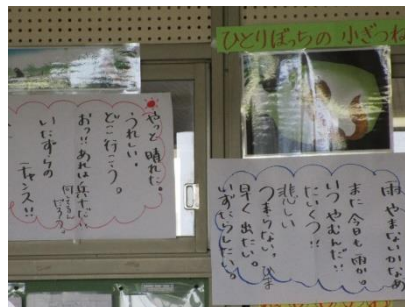
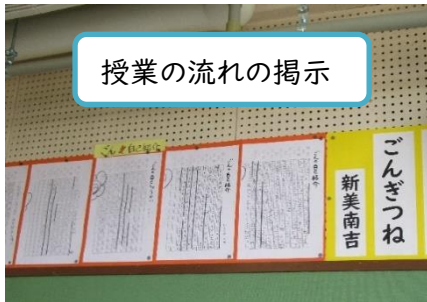
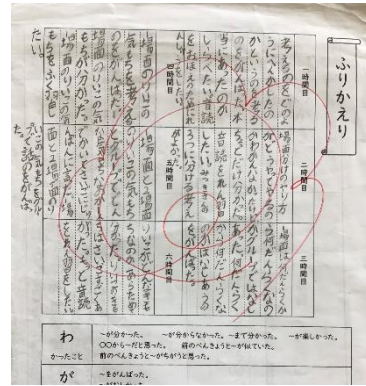
特別支援学級での支援

⑤ふり返りの充実

- ・視点を提示して授業のふり返りをさせ、単元を通して 1 枚のシートにふり返りを書かせることで、自分の変容に気づけるようにした。また、授業の流れ等を掲示し、その単元をふり返ることができるようにした。

↓「これまで」は、くくくだった。
↓前の時間や今までの学習はどうだったか。
【この授業】
↓今日の授業はどうだったか。
↓「これから・次」は、くくくしたい。
↓次の授業はどうしたいか。これからどうしたいか。

わが友がや			
みてみたいこと	友の良かったこと	わが友が良かったこと	わが友が良かったこと
くくくしたい。次はくくくしたい。くくくしたい。	〇〇さんの意見を聞いて、自分もくくくした。〇〇さんとくくくした。〇〇さんの考えのいいところは、くくく。	くくくが良かった。くくくが良かった。くくくが良かった。くくくが良かった。	くくくが良かった。くくくが良かった。くくくが良かった。くくくが良かった。



⑥授業以外の取組

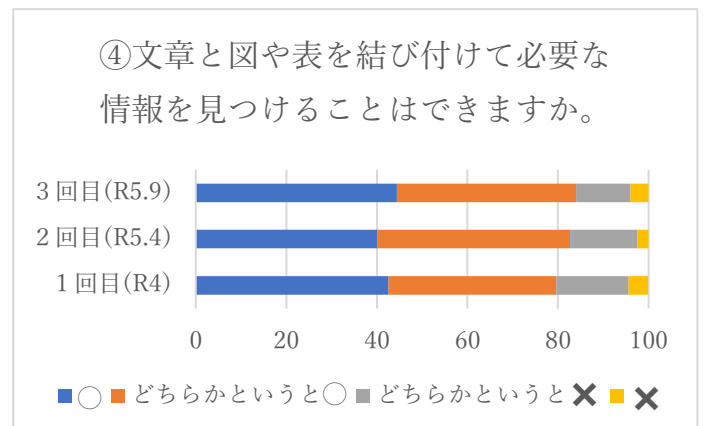
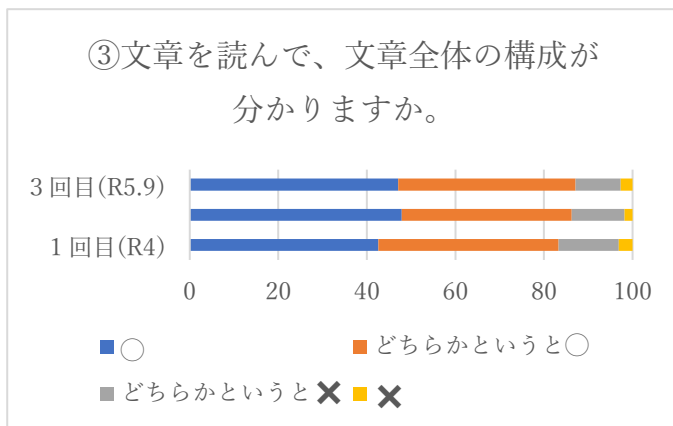
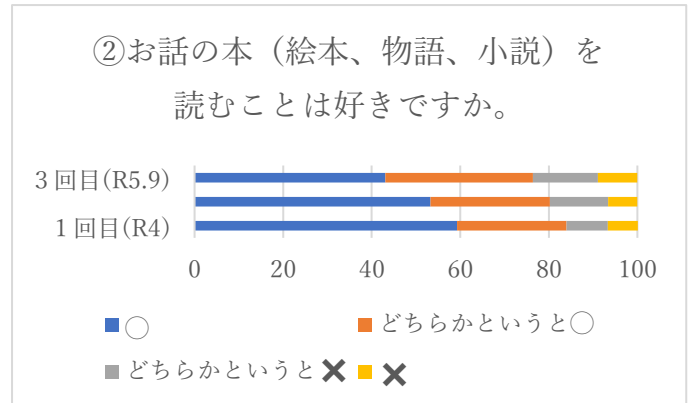
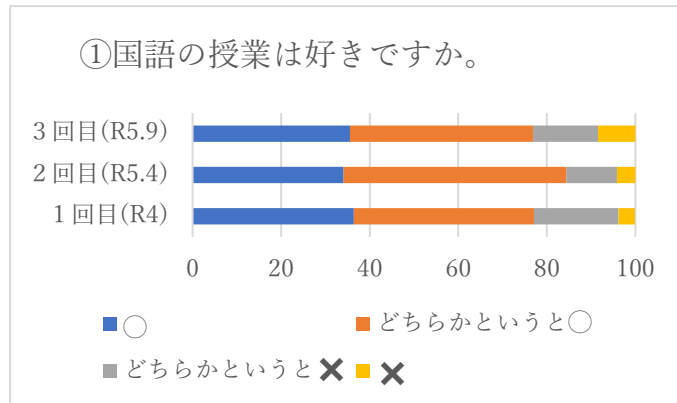
- ・詩等の暗唱、自主学習の推奨、並行読書・読書活動の推進をし児童の主体的態度を育成した。



朝読書時に図書ボランティアによる読み聞かせも行っています。



⑦児童へのアンケート結果



3 成果と課題

【成果】

- 児童中心の授業を構成していくことで、主体的に授業に参加する児童が増えた。
- 重点事項を1つにしぼって指導することで、各単元の指導項目が「わかった」「できた」という児童が増えた。
- 授業のUD化やICT活用で、配慮を要する児童も授業に参加できるようになった。
- 学び合いの中で、ジャンプの課題を設定することで、学習意欲の向上に繋げることができた。

【課題】

- ・児童の意識面では国語の授業内容を理解できると答えているが、埼玉県学力・学習状況調査や単元末のテストの結果から、学力面では依然として課題があるので、さらなる学力向上策の研究を続けていく。
- ・国語の授業への意欲はあるが、読書の推進までには、繋げきれなかったため、今後も引き続き対策を講じ、進んで読書をする児童を増やしていきたい。

1 研究主題

人間関係づくりを通して体力を高める児童の育成

2 主題設定の背景と仮説の設定

本校では、長引くコロナ禍の影響から、子供たちどうしが学校生活、及び授業内で関わる場面が大きく制限され、また良好な人間関係を育む機会が失われ、トラブルが頻発していた。加えて、子供たちの体力も低下し、体育への意欲も向上しない状況が続き、県下でも危惧されている『運動好きの体育嫌い』の児童が本校でも多くいた。そうした状況を改善するため、体育科を通して良好な人間関係と体力向上を行えないかと考え、主題の設定に至った。

そして主題を実現させる手立てとして、本校は、運動の本質に触れる楽しさを味わわせるための『魅力的な活動』と、学び合いの効果を高めるための『意図的な関わり合い』の2つをキーワードとし、

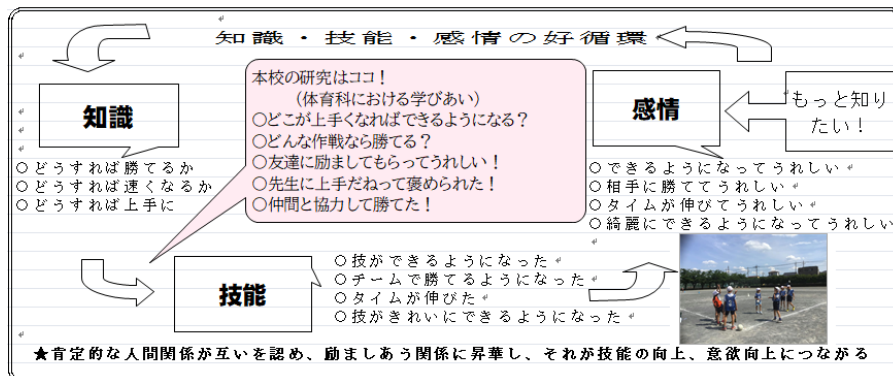
- ① 魅力的な活動を取り入れることで、進んで運動に取り組み、体力の向上につながるであろう。
- ② 意図的に仲間との関わり合いを取り入れることで、学び合いが深まり、体力の向上につながるであろう。

の2つの仮説を立て、主題の実現にせまっていた。

3 本校における意図的な関わり合い(学び合い)とは

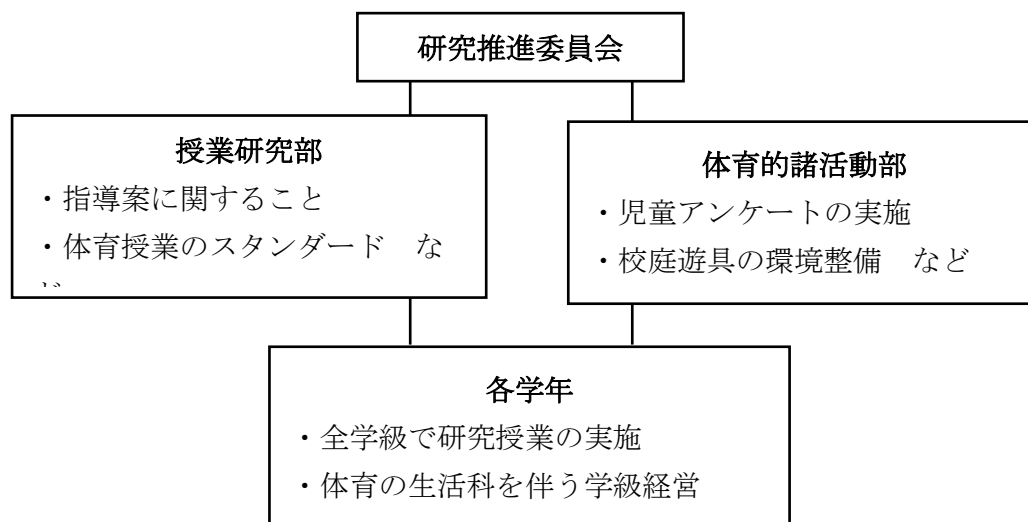
本校では、従来型の『練習量を増やして体力や、技能を向上させる』体育と並行し、『良好な人間関係作りを通した学び合いでも体力を高められる』ことに焦点を当てている。

具体的に、①知識(どうすればできるか)、②技能(技ができるようになった)、③感情(もっと高めたい)、①知識(どうすればできるか・・・)、といった①、②、③・・・のスパイラルによって体育が好きになっていく過程の中で、本校の研究は①知識から②技能へシフトする中での学び合いを研究した。(下図参照)



4 研究組織

本校の研究組織は研究推進委員会を軸として、授業研究部と体育的諸活動部の専門部会が設けられている。その2つの専門部会が授業づくりや、環境を整備することで、全学級が同じ基準や器具を用い、研究が行えるよう組織づくりを行った。



5 仮説にせまる手立てと主な取り組み

仮説①魅力的な活動	仮説②意図的な関わり合い
場の工夫 ・マット運動では、坂や細道をつくり、より多くの場を設定する。 ・ルールを子供たちと考え、授業を作っていた。(クラスごとにルールが異なる。)	グルーピングの工夫 ・単元や学年の実態に合わせ、グループを同質にしたり、異質にしたりした。 ・生活班をベースにしたチーム作りも行った。
教材・教具の工夫 ・タブレットを活用した授業の展開。(振り返りを動画撮影形式で行った。自分の技をセルフカメラで観る等)	授業展開の工夫 ・ゲームでは作戦タイムを多めにとり、児童どうしが関わりあえる時間を確保した。
単元計画の工夫 ・単元の名前をより子供の興味を惹きやすいよう、学年、学級の実態に合わせた。 ・毎時間記録等を計測し、個人やチームの伸びに注目させた。	教師の積極的な声掛け ・教師が1時間に100回の肯定的、具体的な声かけをめざし、意欲の向上を図った。(肯定的、具体的声掛けの例・・・ひざがしっかりと伸びていて技がきれいですね。)
学習カードや掲示物の工夫 ・学習カードでは毎時間の振り返りを大切に、自己の学びを確認できる場とした。 ・児童どうしの言葉や、運動のポイント等を記録し、賞賛、掲示を行った。	体育の生活科 ・チームの対戦表や、技のポイントを教室内で掲示することによって、体育の時間以外にも、体育に関わる会話が増えるように促した。

6 研究のあゆみ

令和4年度

- 5月30日 講演会
- 11月28日 低学年全体研修会 単元名：ボールけりゲーム
- 12月12日 中学年全体研修会 単元名：小型ハードル走
- 2月14日 高学年全体研修会 単元名：跳び箱運動

令和5年度

- 6月12日 低学年全体研修会 単元名：マットを使った運動遊び
- 6月29日 中学年全体研修会 単元名：キックベースボール
- 7月 3日 高学年全体研修会 単元名：跳び箱運動
- 11月10日 入間市教育委員会・入間市教育研究会委嘱 研究発表会

～当日の公開授業～

- ・ 1年2組 単元名：アズマーの冒険～動物島を抜け出そう～
(マットを使った運動遊び)
- ・ 3年1組 単元名：チームで、優勝目指して勝ち進め！！あず小シリーズ！
(ベースボール型ゲーム)
- ・ 4年3組 単元名：体の成長とわたしく保健>
(よりよく成長するための生活)
- ・ 6年2組 単元名：あずっ子パワーでLet's challenge!
(跳び箱運動)

1年2組



3年1組



4年3組



6年2組



7 成果と課題

2年間の研究を経て、子どもたちは関わり合いの中で知識や技能、学びに向かう力が育つことが分かった。技能面では、「自分の言葉」で相手に伝えるほうが伝わりやすく、ペア・グループでの関わり合いを通し、向上が認められた。ゲーム形式の授業ではタブレットを用いたペア・グループの作戦会議や、インタビュー形式の振り返りを行うことで、具体的な言葉を多く引き出すことができた。場の設定にも工夫を行い、オリジナルの体操を作ったり、教室に体育のコーナーを設けたりし、意欲の向上につなげた。

体育的諸活動部のアンケートからも、『友達に意見を言い、友達ができるようになった』や、『友達に言われ、できるようになった』などの数値も上がり、関わり合いを通した成果が子供たち自身にも実感させることができた。

今後の課題については、「〇〇遊び」、のような単元ではどこまで技能を求めるのか、ゲーム形式の授業では複雑なルール作りや時数、運動時間のバランスは適切か、器械運動では子どもどうしのアドバイスの質を高めるにはどんな手立てがあるのか、等が挙がり、今後の研究を通して追求していきたい。

研究主題

児童が互いに認め合い、伸び伸びと自己表現できる学級と学びの土台づくり
～国語科の学習を通して～

入間市立高倉小学校

1 主題設定の理由

新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善を行うことを基本とした上で、埼玉県学力・学習状況調査などの結果から、本校の児童は「自分の考えを表現する力」「思いや考えを伝える力」「物事を順序だてて説明する力」に課題があることが分かった。そのため、昨年度は算数科の学習を通して学び合いの研究を行った。2年間の研究を通して、子供たちは自分の考えを伝えたり相手の考えを聞いたりする中で新たな視点に気づき、さらに思考を深めようとする姿が見られ、学力も徐々に成果が見られるようになってきた。しかし、埼玉県学力・学習状況調査の他、日々学習している子供たちの様子から、文章問題の無答率が高いこと、問われている内容が理解できていないことが新たな課題となり、今年度は国語科を通して学び合いの研究を行うこととなった。

今年度の校内研修の目標は、教師が国語科指導法・教材研究の基礎基本を学ぶことに加え、入間市の取り組みである「学び合い」に取り組むことである。国語科を学ぶために、模範授業を見て学ぶこと、教材研究の充実、先行の指導案から学ぶこと、1人1回の授業研究、夏休みの指導者を招いての研修を取り入れた。また、学び合いを学ぶためには、豊岡中学校、黒須中学校等の授業を見て学ぶこと、指導者を招いての研修を行うこととなった。

令和5年度の校内研修の目標は、今年度身に着けたスタンダードを土台として、新学習指導要領に即した授業改善を目指すとともに、学び合いを通して自己表現できる学級づくりを目指していく。

2 めざす児童像

「互いに認め合い、伸び伸びと自己表現できる児童」

【具体的な児童の姿】

- ・自分の考えを友達に伝えることができる。
- ・友達の考えや頑張りを認めることができる。
- ・難しいことにも進んでチャレンジしている。
- ・自分の主張・根拠・理由を持つことができる。
- ・友達の考えを聴くことができる。
- ・自分から進んで学習に取り組もうとしている。
- ・正しく音読することができる。

3 研究仮説

児童の読む力の定着と伝え合う力の向上を図るために、①学習する楽しさや伝える楽しさを味わい、②互いに考えを伝え合う経験を積むことで、児童が互いに認め合い、伸び伸びと自己表現できるようになるであろう。

6 おもしろ国語部の取り組み

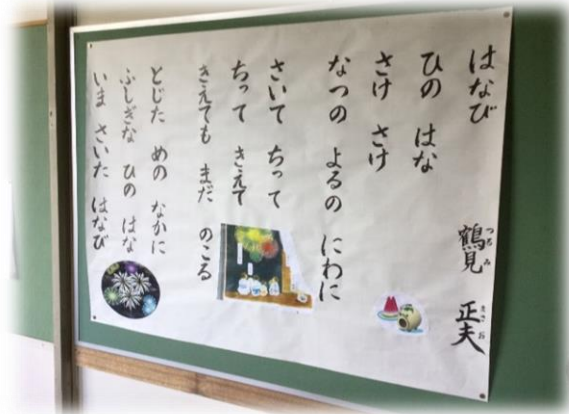
教室で行う授業以外のアプローチで国語に対する興味関心を伸ばし、言語感覚を育成することを目的として、おもしろ国語部は活動を進めた。普段何気なく使っている言葉や漢字に興味を持ってもらえるように言葉の二択のクイズや並び替えなどを掲示する「おもしろ国語コーナー」を設定した。各学年に応じた難易度のクイズを設定し、それぞれ違った問題を掲示することで、興味の湧いた児童が他の学年をめぐることで、問題が解けるように工夫をした。



【取り組みの一例】

(1) 季節の詩

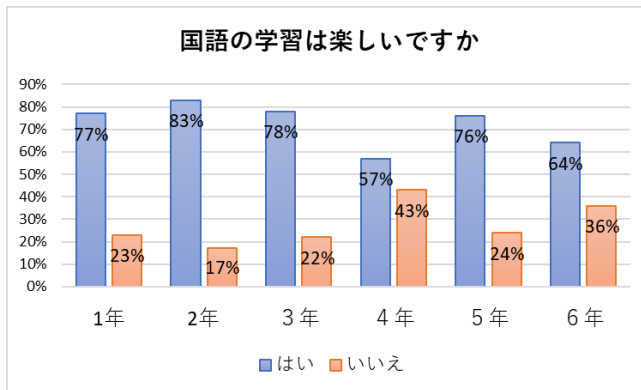
日本特有である四季を感じさせる詩を掲示した。その季節ならではの言葉が入っているものを選択し、その時期に合わせて、およそ三か月ごとに詩を張り変えた。



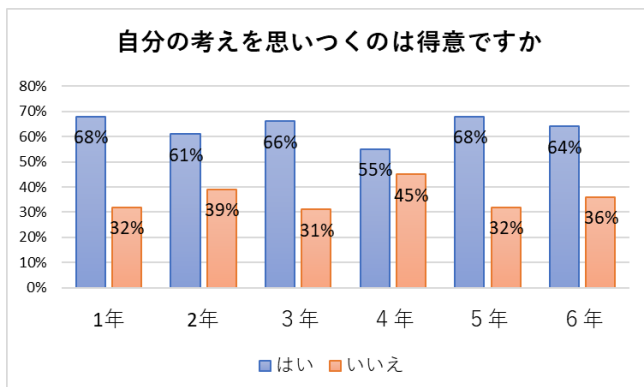
7 調査部の取り組み

国語 学習アンケートの結果から

令和5年5月に実施した児童への「国語 学習アンケート」では、以下のような結果がみられた。



全体として国語の学習を楽しんでいる児童が多いが、学年が上がるにつれ楽しいと思う児童が減っている。特に4年生で、楽しくないと感じている児童が多いことが分かった。授業の中で、「自分の考えを持つ」ことができていると感じている児童は全体として6割である。



「友達に自分の考えを伝えるのは好きですか」という質問については、「いいえ」と答える児童の割合が増加し、特に3年生、4年生、6年生では、ほぼ同じ割合となっている。自分の考えを伝えることに対する抵抗感が強いことが分かった。自分の考えを持つこと、相手に考えを伝えることに課題があることから、解決のための手立てが必要であることが分かった。

8 校内研究の成果と課題

成果

- 「高倉スタンダード」を確立させることで、児童が学習の見通しを持てるようになり、児童が進んで学習に取り組むことができた。進級しても同じスタイルで学習でき、児童が安心して学習できる環境が整った。
- ペア・グループ学習を意図的に取り入れることで、抵抗なく自分の考えを言えるようになり、児童が主体的に学ぶ習慣がついた。それにより、児童から「またやりたい・楽しかった。」という言葉があがった。
- ペア・グループ学習の中で、「どうしてそう考えたの?」「こういう考えもあるよ」「なるほど」などの言葉が増え、学習の楽しさを感じたり、人の考えを認めたりすることにもつながった。
- コの字型の机配置にすることで、考えを聞いてもらえる安心感や相手を見て話を聞く姿勢の習慣化につながり、意欲的に学習に取り組むことが増えた。
- 音読の宿題のみではなく、授業の中で音読をする機会をとることで確実に読む力が伸びている。
- 振り返りを継続して取り入れフィードバックすることで、児童の気づきや実態を把握でき、「次はこんな学習をしたい」「今日習ったことを使って…」など、前向きな振り返りに変わってきた。次の学習への目標を立てることにもつながっている。

課題

- 考えの深まりをもたせるために、友達の考えに付け足しをしたり、友達のことをつなぎ合わせて考えを生み出したりするなど、スモールステップで手立てを講じていく。グループやペアで1つの考えに絞る活動も必要かもしれない。
- 自分を認める、自分の考えをもつために振り返りが重要だと感じた。十分な振り返りの時間を確保していきたい。
- 全ての単元・時間を学び合いで行うことに難しさを感じた。「学び合い」の取り入れ方を検討していきたい。

『 主 体 的 に 学 ぶ 生 徒 の 育 成 』

～「個別最適な学習」と「協働的な学習」を軸に～

藤沢中学校

1 はじめに

ここ数年、コロナ禍や令和3年度における学習指導要領施行等、学校教育を取り囲む環境は大きく変化してきている。本校においても「何を学ぶか」から「どのように学ぶか」への転換を進めてきた。その軸として「主体性」に着目してきた。

主体性とは、考えや行動が他の人から見ても正しいと判断される性質と考えている。そのためには、生徒自らが「やりたいこと」を探る過程で、より自己を高めていくことが大切である。

そこで、生徒が自己調整をしながら学習を進められる「個別最適な学習」と、他者と学び合う「協働的な学習」を軸に研究に取り組んできた。

2 本年度の取組

(1) 「個別最適な学習」と「協働的な学習」における「学びの往還」

①個別最適な学習：生徒が自己調整しながら学習を進める。

授業における「振り返り」の中から、個人の興味関心に着目し個別最適な学習に繋げる。その際に、特に自己評価表をただ「感想」とするのではなく、「大切だと思ったこと」「さらに学びたいこと」に統一して実施した。

1番大切だと思ったこと さらに学びたいこと	家庭 学習	検印
今日の授業では、求めたいものを決め から計算を用いた。宿題で分からない ところがあったら、よくしめした。い。	復習 予習 応用	

図1 振り返り例

②協働的な学習：他者と学び合う。

学び合いになった時に、それぞれの「見方・考え方」をとらえることのできる課題設定をする。加えて、学び合いをする隊形にも着目し、単純に机をつけるのではなく、T字型にすることで、より相談しやすい体制を作りあげる。



図2 協働的な学習

③学びの往還

生徒の言葉によるまとめ、グループでの学び合いから全体の学びへとつなげる過程から、改めて自分の「まとめ」を振り返ることで、個別最適な学習へとつなげる。

その上で、家庭学習にも主体的に取り組むことのできる課題設定、支援を進めた。

(2) 全校授業研究会

個別最適な学習と協働的な学習を軸に取り組む過程から、授業研究会（表1）を実施した。中でも、前年度学校評価における意見として、授業研究会の持ち方に関して以下の提案がなされた。

・教科にとらわれずに、全員が参観する。

表1 授業研究会一覧

・生徒の学びに着目する。
これを受けて、授業に参加する側の見方を大きく変更させた。

具体的な進め方として

①事前に分担した学習班の生徒の活動を主に観察する。

②授業後、分担した学習班ごとの教員で分科会を持ち、生徒の学びについて分析する（図3）。

③全体会で、各分科会からの発表を行い、全体の共有を図る。

今までの授業研究会は、教師の指導内容に傾注されがちであった。結果、参観する職員も教科担当でなければ、専門ではないからと言って、なかなか意見が出しにくい雰囲気になってしまっていた。今回の提案より、生徒がどのように学び、学習した内容を高めようとしたかが着目されることになった。

結果、授業での学び方、今後の学び方についての意見交換が進められ、授業者にフィードバックされることとなった。

このことについては、藤沢中学校区小中合同研修会で藤井 千春先生（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）にご指導をいただいた点も大きな影響を受けた。

日時	教科	授業クラス	授業者	指導者
5月10日	社会	2年1組	授業者	金箱教諭
			指導者	小椋指導主事
6月22日	国語	1年1組	授業者	粕谷教諭
			指導者	岡崎指導主事
	美術	1年2組	授業者	中村教諭
			指導者	采澤先生（野田中教頭）
	数学	1年3組	授業者	星野教諭
			指導者	田中指指導主事
	社会	1年4組	授業者	佐藤教諭
		指導者	小椋指導主事	
9月11日	保健体育	3年1組	授業者	原山教諭
			指導者	藤井千春 早稲田大学教授
11月10日	数学	3年4組	授業者	吉武教諭
			指導者	藤井千春 早稲田大学教授
11月10日	国語	3年2組	授業者	田中教諭
	社会	3年3組		山崎強教諭
	数学	1年2組		神原教諭
	理科	2年5組		岩田教諭
	音楽	2年2組		原教諭
	保健体育	2年3組		江原教諭
	英語	2年4組		小澤教諭
数学	あすか学級	村岡・河野教諭		



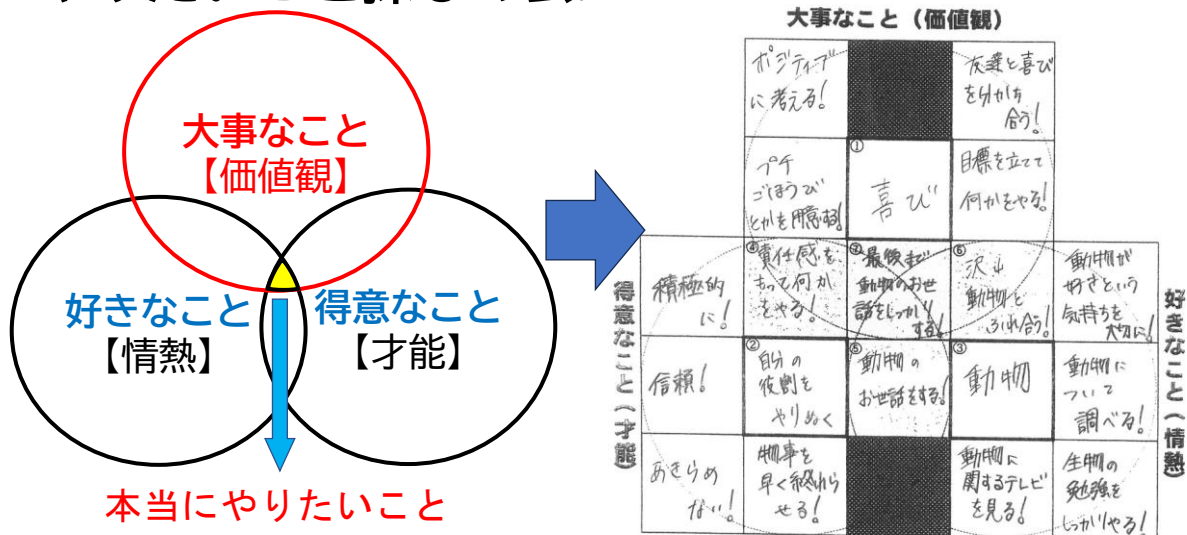
図3 生徒の学び方を分析する分科会

(3) 何をすべきか考える

① やりたいこと探し：主体性を育むために、自分のやりたいことを探す。

全校朝会での校長講話後に、各学年でオクリンクを活用して実施した。100枚のカードから5枚のカードを選択する過程で、アクションシート（図4）に記入することで自己理解を図る。振り返りから、やりたいことの達成状況を自分自身で把握させる。同時に、オクリンクの機能から友だちの「大事なこと」を共有することで、個の学習に留まらず、協働的な学習に繋げた。

やりたいこと探しの公式



公式 好きなこと×得意なこと×大事なこと
=本当にやりたいこと

アクションシートに考えを記入していく

図4 やりたいこと探しの公式

② 藤沢未来ネット：生活を見つめ直す。

上藤沢中・日々輝学園・藤沢地区区長会と連携し、地域社会の一員として、自分たちに何ができるかを考え、実践する活動を進めた。入間市長杉島理一郎氏による入間市SDG's 未来都市計画基調講演（図5）を受けて、全校で自分たちの生活を見つめ直すことを行った。

同時に、今の自分たちの生活から考え、見直すべき校則について議論し、全校に問う活動に繋げていった。

喫緊では、入間市特産品のお茶の有効活用方法について検討、提案を行った。



図5 入間市SDG's 未来都市計画基調講演

(4) 主体的な学びのきっかけ

①新聞記事学習：読売新聞ワークシート通信の活用。

週1回朝読書の時間に、読売新聞ワークシート通信（読売新聞読解力向上プロジェクト）を実施した。ワークシートは、言語能力や情報活用力、論理的思考を伸ばすことを目的として作成されたもので、総合的な学習担当者がワークシートを選択し実施した。

②家庭学習ノート：個別最適な学習の支援。

教科や内容・量は自分で考える。教科に関していけば、何でもよい。授業の復習や予習、さらには授業で学んだことを、さらに調べてきてもよい。あくまでも、自分で主体的に取り組むことを主として実施した。



1週間に一度校長へ提出（図6）することになっているので、中には行事等の感想を書いてくる生徒もいた。

3 成果と今後の課題

成果として、埼玉県学力・学習状況調査における令和4年度および令和5年度に学力を伸ばした生徒の割合を比較した（図7）。県平均を基準としたとき、令和4年度は、ほとんどマイナスであった。しかし、令和5年度では大きく向上した。現2年生の数学が県平均から-0.3%であったが、前年度より1.5ポイントの向上を見ることができた。特に、国語に関しては全国学力・学習状況調査でも全国平均を越える状況が見られた。

同時に、学校評価における質問項目「生徒は、主体的に活動できている」に対する職員の回答は、100%「できている」であった。生徒に対して同様の質問では、85%の回答を得られた。また、学校行事後に参観した保護者への調査では、「生徒の取り組み」は100%「よかった」との回答を得ることができた。主体的な生徒の活動は、認められてきた。

反面、生徒の意識では46%の生徒が、「進んで学習していない」と考えており、前年度より増加している。このことに関して、「学び合い」がミニティーチャーの教える場になってしまい、自分で学ぼうとする場にならないことがあるという報告があげられている。

加えて、振り返りシートの確認作業に多くの時間を有することが挙げられている。ICT化等の工夫も検討されているが、生徒の多様性を生かすために十分な検討が必要である。何よりも、生徒間、生徒教師間の良好な人間関係が重要となる。

今後も、信頼関係を高める中、生徒の主体性を育む教育活動に取り組んでいきたい。

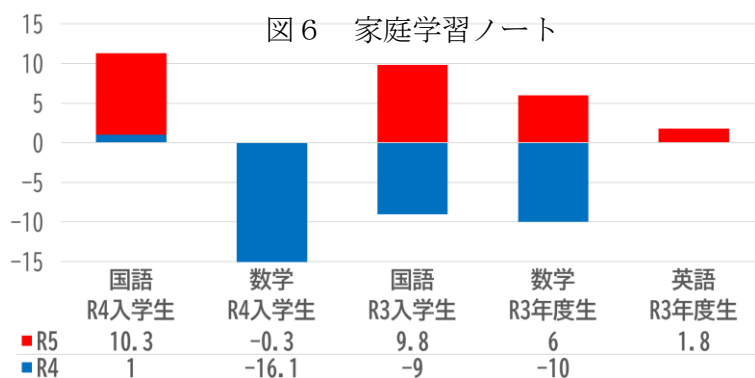


図7 埼玉県平均を基準とした学力を伸ばした生徒の比較

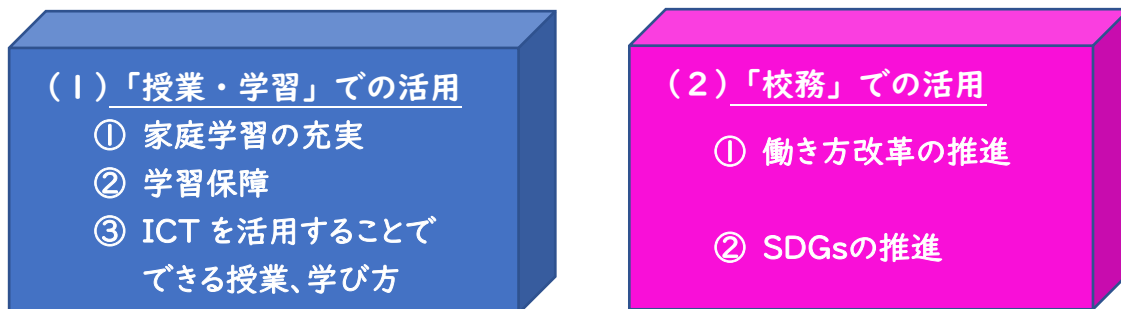
研究主題 「様々な教育活動における ICT の活用」 入間市立野田中学校

1 主題設定の理由

世の中では、Society5.0 という言葉が浸透しつつある昨今、インターネットや ICT 機器の発達・普及により、生活の様式も大きく変わってきている。教育現場においても「GIGA スクール構想」の推進により、学校の ICT 環境も大きく変化した。また、「働き方改革」もクローズアップされるようになってきた現在、教職員が日常的に取り組む業務として、授業のみならず校務にも目を向け、ICT 機器のより効果的な活用について探求すべきと考えた。

2 研究の柱

本研究を円滑に進めるため、「授業・学習」「校務」2つの柱立てを行い、それぞれの領域の中で、具体的な取組について研究を行った。



3 研究組織



4 研究の具体的な手立てとその成果

(1) 「授業・学習」での活用

① eライブラリ等を活用した家庭学習の充実

eライブラリを活用することで、プリントの印刷、配付、回収、チェックなどの作業がなくなり、教師の負担が軽減される。また、eライブラリを通して、生徒の学習状況を把握することが容易となり、その後の授業改善につなげることが可能となる。

〈成果〉生徒の苦手を把握し、長期休業中の課題等で弱点克服に努め、県学調で数値の向上が把握できた。

例) 現2年数学 ・正答率64% (県59%)
・伸び「2」 (県「1」)



② 欠席者に対する Zoom を活用した学習保障

各クラスに Zoom の ID・PW を設定し、学校外からでも授業が受けられるようにする。生徒の欠席・出停の際などに、保護者からの要請に基づいて授業配信を行うという体制を整えた。

〈成果〉配信方法や実施形態を工夫しながら、教員にとっても負担の少ない方法で、学習が保障できるような形を模索しながら、本人・保護者からの希望に、できる限り応えることができた。



③ ICT を活用した授業展開の研究

ICT を活用することで可能になる授業事例の研究を行うに当たり、大きく4つのチームに分かれて研究を進めた。

〈成果〉4つの分科会ごとに研究を行うことで、教科を超えて共有できるノウハウや手立て、今後の可能性について様々な視点から考えることができた。

チーム A 【文系教科】

プレゼンテーションアプリを活用したモニター表示

学習の情報量増加や繰り返し学習の最適化、より良い手本の提示等を可能にした。

チーム B 【理系教科】

Google スプレッドシートの活用

データ入力後、表やグラフの即時フィードバックを可能とし、生徒の思考時間を充実させた。

チーム C 【技能を伴う教科】

オクリンクの活用

録音、画像、動画のデータのやり取りから、指導と評価を充実させた。

チーム D 【特別な教科道徳】

オクリンクやムーブノートの活用

「心情円」や自分の考えを共有しやすく、授業を通して思考を深めることができた。

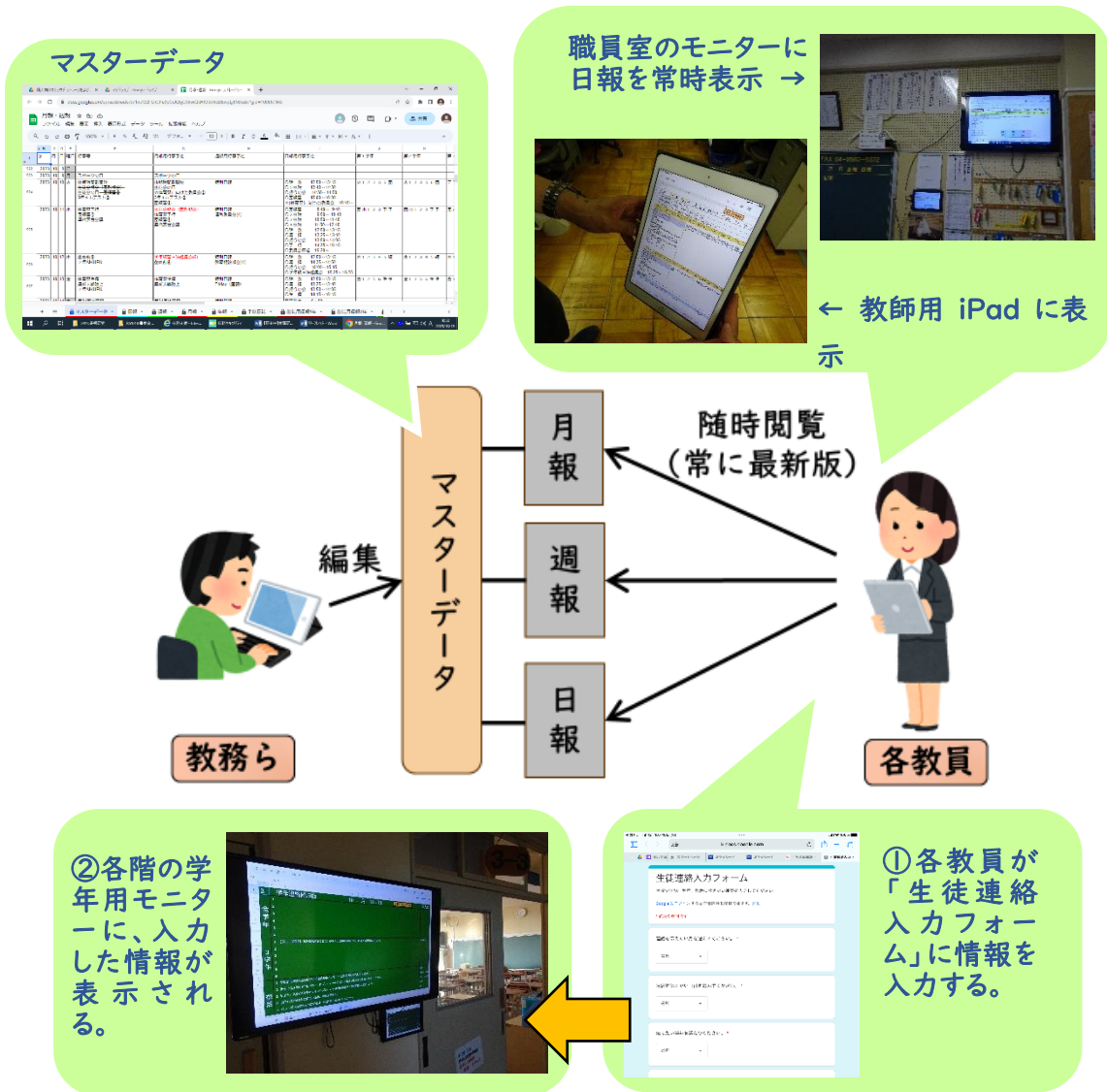
(2)「校務」での活用

① Google スプレッドシートやフォームを活用した校務の最適化と負担軽減

スプレッドシートやフォーム等のアプリケーションを活用することで、教職員の日々の校務を最適化し、負担軽減を図れると考えた。

【構築したシステム】

- ・日報・週報・月報等をスプレッドシートで作成・管理。
- ・各階に設置した大型モニターから生徒へ連絡。
- ・フォームを活用したアンケートで集計作業の負担を軽減。



〈成果〉 日報・週報・月報など、スプレッドシートやフォームを活用することで、記載情報や日程を一元管理が可能となり、作業効率の向上と伝達速度・精度の向上が図れた。また、各種アンケート調査においても、集計時の作業軽減とペーパーレス化が可能となった。

② AirDrop やリーバーを活用してのペーパーレス化

職員会議等で配付する資料を PDF にしてタブレットへ AirDrop で送信することで、ペーパーレス化を推進する。

また、家庭への配付物(学校・学年・学級通信等)についても、リーバーを活用することで、紙やインクを使用せず、資料のカラー化を実現する。

〈成果〉 タブレットを活用頻度が増えることで、校内でのペーパーレス化が推進している。職員会議資料は、AirDrop で受信した電子データに、タッチペンを使って書き込むという光景が一般的になっている。このような取組の積み重ねにより、印刷用紙の使用量も削減された。A4コピー用紙の購入数を比較すると、1学期間だけでも、およそ 26%の削減となった。



5 研究のまとめと今後の課題

本研究を通して、教育活動の様々な場面において、ICTを活用することで得られる多くの効果を確認することができた。ICTを活用した授業では、板書の時間やプリントを配付する時間が大きく削減されたことで、授業を効率的に進めることができた。その結果、生徒の「思考する時間」を今まで以上に確保することが可能となり、学びの質や量を高めると共に、教職員が適切に観察・評価するための時間と心の「ゆとり」を生み出すことができた。

次に、授業以外の校務では、今まで教職員が行ってきた事務的な業務をデジタル化することで、業務プロセスの短縮化や効率化を図ることができ、教職員の負担を大きく軽減することができた。さらに、印刷作業の削減は職場のペーパーレス化を促進し、限りある資源の有効活用につながった。

今後の課題は、現状、本校内のICT機器やネットワークシステム等の操作や軽微なトラブルについて、ICT担当の教員が全て対応していることである。今後さらに学校教育でのICT化・デジタル化が進むことが予測される中で、全教職員が、ICT機器の操作方法や軽微なトラブルへの対処法等の基本的な知識を習得し、「いつでも」「どこでも」「誰でも」を実現するために、「操作マニュアル」の整備と「ICT活用研修」の適宜実施が必要不可欠であると考ええる。

また、授業では、教師が指導のねらいを明確にし、ICT活用の効果を十分に理解した上で、「活用する」場面と「活用しない」場面を設定し、授業を組み立てることが大切であると考ええる。



研究主題

『学び伸びる 東金子の子 育成』

～一人一人に確かな「生きる力」を～



1 はじめに

本校の実態として、児童は素直で比較的落ち着いている。しかしその反面、学習に向かう姿勢には個人差も大きい。学力面では、県や市の平均より低く、学力向上が喫緊の課題となっている。また、経験年数10年未満の教員が多く、学力向上の実現には教員の指導力の向上が必要となっている。

このような現状をふまえ、学校教育目標の達成に向け、教員の指導力向上に焦点をあてた研修を目指した。「生きる力」育成に向け、国語、算数、道徳、体育の指導法を追求し、全教員が外部指導者を招聘して授業研究を行った。その際、各教科の「授業スタンダード」を基にし、授業研究を通して日々の授業力向上を目指してきた。

2 実施内容

(1) 指導力向上に向けて

- ①研究授業【国語（7回）算数（7回）道徳（2回）体育（2回）】・・・全教員が外部指導者を招聘して行った。



【国語】児童の思考を深める切り返



【算数】指示と称賛が繰り返される授



【道徳】教師がねらいをしっかりともった授



【体育】運動に熱中できる場の工

- ②ワークショップ形式による研究協議会・・・「子供が考え活躍する授業であったか」「丁寧に分かりやすい指導であったか」の2点で協議を行い、日々の授業の改善を図った。
- ③研究通信を発行し、授業研究会の大切な部分を全体で共有した。



参観者全員で学びを共有し、日々の授業改善へと繋げてい



(2) 授業の充実

- ①主体的、対話的で深い学びを目指し、スタンダードを基にした日々の授業の質的改善に努めた。
- ②道徳や学級経営など、全ての教育活動を通して、非認知能力を意識的に高める。

(3) 検証テストの実施

- ①毎学期末に検証テストを全学級で行い、学級ごとに児童の理解度を確認する。また、正答率の低かった問題を中心に復習を行い、学習の定着を図る。
- ②担任が自学級の定着度を把握し、自分の指導の振り返りをし、改善を図る。

(4) 家庭との連携

- ①定着・習熟・実践に向け、家庭学習を推進し、保護者にも発信する。
- ②学校便りや学年便り、懇談会で学力・徳力・体力を話題にし、保護者の意識改革を行う。

3 本年度（令和5年度）の成果と課題 ※成果○ 課題△

- 県学力調査において、一定の伸びが見られた。伸び率を見ても、大きく伸びている。
- △全国・県平均には届かず、特に算数が低く、平均との差も大きい。
- 家庭学習や読書の時間も、前年度より長くなり、全国平均に近づいてきた。
- △しかし、依然として全国平均には届いていない。
- 授業研究会等を通し、専門性の高い指導者からの指摘を受け、授業改善が進んだ。
- △主体的・対話的で深い学びの実現がまだ不十分。

4 来年度（令和6年度）へ向けて

- ①授業のスタンダードを各自がマスターし、主体的、対話的で深い学びのある授業を実現すること。
- ②読む、書くことへの苦手意識（億劫意識）をもつ児童を少しでも減らすと共に、全体の読む、書く力を高めること。
- ③課題に向かう意欲と、自分なりに考え、課題を解決する思考力を一層高める。
- ④言語活動をたくさん入れた授業により、言語力向上を図る。
- ⑤自主的に学習する仕組みをつくる。・・・目標をもたせる指導を。

主体的に学び、表現する児童の育成

～子どもたちが学びあう国語科の授業の工夫～



1 主題設定の理由

本校では、学校経営理念「かかわることで人は育つ」のもと、対話を大切にしたい授業を推進している。主題設定にあたって、本校児童の課題として、学力調査の結果等から国語科(特に読むこと)に課題がある児童が多いことが挙げられた。そこで、国語科の研究を通じて授業改善を図り、児童の国語力を高め、学びあうことができる児童を育成していくため、本主題を設定した。

2 研究仮説

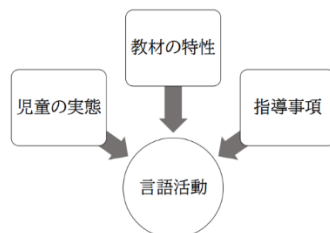
国語科の授業で、学習活動を工夫すると、主体的に学び、表現する児童が育つだろう。

3 研究の内容

柱1 児童が主体的に学習するための手立て

○児童の実態や教材の特性から指導事項を達成するための言語活動の工夫

児童の実態を把握し、教師が教材を読み込むことによりその特性を捉えた。それをもとに、指導事項を達成するためにはどのような言語活動が適切かを考え設定した。



言語活動は子どもたちにとってはゴールだが、教師にとっては指導事項を身につけさせるための手段

○学習活動の工夫

課題意識を持たせる

- 1 単元の導入の工夫
指導事項に合わせて、児童にとって楽しい言語活動を設定する。
- 2 学習計画の立て方の工夫
児童とともに単元のめあてを達成するための学習計画を立てる。
- 3 毎時間の導入の工夫
単元のめあてを達成するために、この1時間は何をするのか明確にする。

適切な学びあいの場の設定をする

学びあいは、「納得解」(自分が納得でき、他人を納得させられる)を導き出すことを目的にした。
課題や発達段階に応じて自分の考えを広げたり、深めたりすることができるように「目指す学びあいの姿」を設定し、様々な学びあいの形式を試行錯誤した。

ふりかえりの質を向上させる

ふりかえりの質を向上させるために意義を伝え、視点を明確にした。

- 【ふりかえりの視点】
- ①これまでの学びの自覚
(～がわかった。)
(～できるようになった。)
(～をがんばった。)
 - ②これからの学びの見通し
(～のときは、どうなのかな。)
(次は～してみたい。)
 - ③活用と探求
(次は～したい。)
(もし～だったらどうかな。)

柱2 児童が自分の考えを形成し、表現するための手立て

○金子の目指す学びあいの姿や系統性の設定

《金子が目指す学びあい》

「友達の意見を聞いてみたい！」「これをみんなで話し合いたい！」と、
自分の学びで満足せずに他者と協働的に学ぼうとする姿勢・態度。



低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ・教師が提示した視点の中から選んで質問することができる。 ・聞かれたことに答えることができる。 ・自分の考えを話すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視点が与えられなくても、質問することができる。 ・原稿を用意せずに質問に答えたり話したりすることができる。 ・一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の知りたいことに合わせた質問をすることができる。 ・友達に聞いたことや、話し合ったことから自分の考えを広げたり、まとめたりすることができる。

○個で考えたり学びあったりする表現方法の工夫

「読解力」→「読解表現力」に！ 読み取ったことを根拠に自分の考えを表現する力
多様な表現方法に触れられるように、児童の実態や意図に合わせた表現方法を検討した。

音声言語		
		
音読	話し合い	朗読
文字言語		
		
書いて見せる	考えをまとめる	ICTを活用して共有

○言語活動に必要な技能向上に向けた帯活動の設定

「保護者ボランティアによる読み聞かせ」「3分スピーチ」「言葉集め」「ちよっトーク」「感情読み」

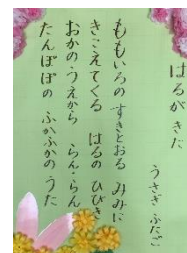
4 成果と課題

○年間6回の研究授業と、4名の指導者の方からのご指導をいただき、研究が深まった。研究仮説と手立ての見直しを行い、学年ごとの学びあいの姿の系統性を整理できた。

●児童にとって魅力的な言語活動となるように、導入の工夫や活動内容の検討を行う。



先生のおすすめの本コーナー



詩の掲示



進んで学び合う児童の育成

～算数科を中心に、学ぶ楽しさを実感させる授業実践～

1 主題設定の理由

昨年度までは、「わかる」授業を目指し、児童が進んで学ぶ手立てを考え、実践をしてきた。その結果、学ぶ楽しさを感じている児童の増加や県学力調査による学力が伸びた児童の割合が多くなったという成果を出すことができた。

今年度は、さらに児童の主体性を伸ばし、学ぶ楽しさをより感じられるよう授業改革に取り組むこととした。そこで、全担任が授業を行う算数科の指導を中心に「学び合い」を授業に取り入れ、授業研究を軸として全校一斉に「学び合い」に取り組みながら研究を進めた。

2 研究の仮説と手立て

① 研究仮説

「探究と協同の学び」を展開し、一人残らず児童の学びを保障すれば、学ぶ楽しさを実感し、児童が進んで学び合うだろう。

② 主な手立て

○ペアや4人班の学び合いグループを作成し、互いに聴き合いながら

課題解決に向かい、一人残らず児童が学びに向かえるようにする。

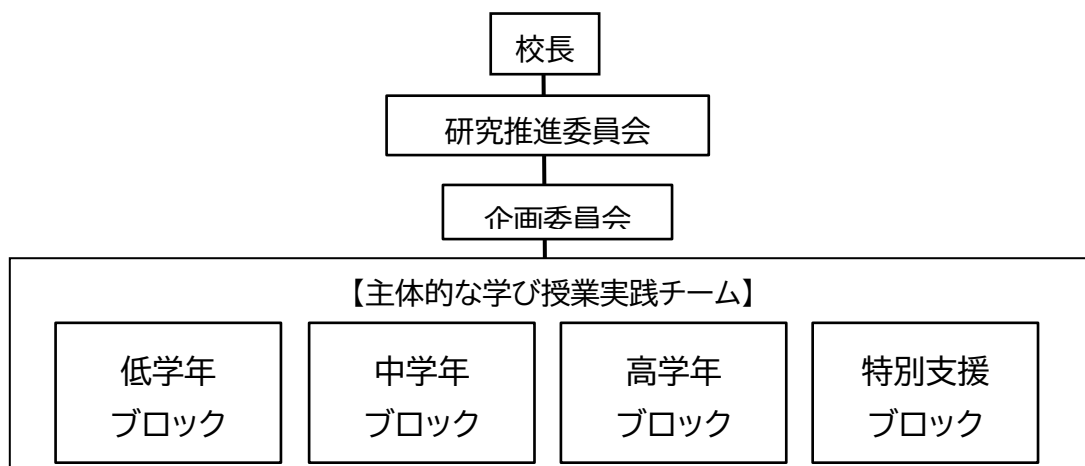
○わからない点や困った点を児童から聴いて共有し、児童同士をつなぎ、課題解決への糸口となるようにする。

○共有の課題を使い、全員が意欲的に取り組めるようなジャンプの課題を設定する。

○誰しものが最初からは解けないような問題(ジャンプの課題)を設定し、全員にとって探求の学びとなるようにする。



3 研究組織及び取り組み



○研究推進委員会で研究の方向性を決め、企画委員会にて周知していく。

○算数科の授業について学年・ブロックで研究を進めていく。

○全体研修を通して情報共有や研究協議をし、授業改善に努めていく。

○各学年1回の研究授業を公開し、指導者よりご指導をいただく。

5 実施内容 <本年度の取組>

4月10日	校内研修	共通行動理解のための研修
5月 8日	校内研修	今年度の研究の共通理解
6月28日	全体授業研究会	2年1組 齊藤 早紀 教諭 算数「100より大きい数をしらべよう」 指導者 入間市立扇小学校 校長 村越 新 先生
7月21日	先進校授業視聴	飯能市立双柳小学校 算数 2年「どちらがおおい」 5年「面積の求め方を考えよう」
7月24日	講演 (武蔵中学校区合同)	演題:「探究と協同の学びの創造」 講師: 学びの共同体研究会 スーパーバイザー 谷井 茂久 先生
9月 6日	全体授業研究会	5年1組 田中 直人 教諭 算数「図形の角を調べよう」 西部教育事務所 指導主事 関 斉史 様
9月19日	ブロック授業研究会	3年1組 又村 枝彫 教諭 算数「まるい形を調べよう」 指導者 入間市立藤沢東小学校 校長 吉野 正美 先生 入間市教育委員会 指導主事 金 佐和子 先生
11月 6日	ブロック授業研究会	1年2組 小林 拓弥 教諭 算数「ひきざん」 指導者 入間市立藤沢東小学校 校長 吉野 正美 先生
11月13日	先進校視察	飯能市立加治東小学校 算数「四角形の特ちょうを調べよう」
12月11日	ブロック授業研究会	6年2組 岡本 拓也 教諭 算数「順序良く整理して調べよう」 指導者 入間市立藤沢東小学校 校長 吉野 正美 先生 入間市教育委員会 指導主事 金 佐和子 先生
1月31日	全体授業研究会	4年1組 長部 幸枝 教諭 江口 佳奈英 教諭 算数「広さの表し方を考えよう」 指導者 入間市立扇小学校 校長 村越 新 先生 入間市教育委員会 指導主事 金 佐和子 先生

6 成果と課題

① 成果

- 互いに聴き合いながら課題解決に向かうことで、児童が学びに向かえるようになった。
特に低位の児童たちの主体性が伸び、学ぼうとする気持ちが高まった。
- しっとりとした雰囲気になり、落ち着いて学習を展開できるようになった。
- 友達に「教えて」と言い、友達から学ぼうとする姿が増えた。
- ジャンプの課題を設定することで、全員にとって探求の学びとなった。

② 課題

- 何がわからないかを児童がなかなか言葉にできずにいた。
解決の糸口へと導くために、これをどのように言語化するか。
- 教師がヒントを小出しにしながらも、子供同士をつなげるようにするにはどうするか。
- ジャンプの課題の難易度を、どの程度のものにしていくか。



【研究主題】

楽しい授業の展開

～教師の主体的な学びが子の最適な学びをつくる～

1 主題設定の理由

本校では、児童にとって算数科における「楽しい授業」の展開を目指して研究を続けてきている。これまでに、学習のスタンダードや各学年に応じた「楽しい」の基準を示した「楽しい」のピラミッドの作成を行ってきた。今年度は、これまでの研究の成果を活かすとともに、学びあいの視点も取り入れた「楽しい授業」の展開を目指すため、上記の研究主題とした。また、昨年度は個別最適な学び



の実施を目指し、児童向けと職員向けの研究主題を設定して研究を行った。職員が主体性を持って研究に参加するために「テーマ研修」と「三部会研修」、「校内研究発表会」を取り入れた。その成果として、一人一人が役割を持ち職員にとっても学びの多い研究となった。そこで副題として～教師の主体的な学びが子の最適な学びを作る～と設定した。

2 研究仮説

教師が自身の課題を明確にして、主体的に学べば、児童一人ひとりに最適な学びをつくり、楽しい授業を展開することができるだろう。

3 目指す児童像

追及し続ける子(もっとやりたい、だれかに伝えたい、どうしてか知りたい)

4 手立て

手立て① テーマ研修の実施

教師が主体的に学ぶために、自身の課題を明確にし、個人のテーマを設定した。設定したテーマから「課題設定力」「授業構成力」「発問力」「対応力」に分かれ、研修に取り組んだ。今年度は、研究授業の指導案検討や研究協議もテーマごとに行った。



【テーマ研修における個人のテーマ例】

課題	○わかった・できたを体験できる課題の工夫について
設定力	○本時が人生の何に役立つのか、本質にせまる課題設定について
授業構成力	○効率的な交流の方法とふりかえりの時間の確保のための工夫について ○1単位時間での課題、自力解決、議論、結果の確認、等のバランス
対応力	○子供の発言(正しい考えも間違った考えも)から考えを深める授業づくりについて ○子ども同士がかかわり主体的に動くための教師のファシリテーターとしてのありかた
発問力	○教師の言葉を少なくし、子どもの考えを広げる発問の工夫について ○子供たちが考えたくなる・活動したくなる発問や言葉かけについて

手立て② 三部会研修の実施

「授業研究部」、「調査統計部」、「研究広報部」の三つの部会に分かれて研究を行った。それぞれの活動内容は以下のものである。それぞれの部が連携をとり確実に成果があがるように取り組んだ。

【授業研究部】

研究授業の視点作りと振り返り
チェックシートの作成・修正


【調査研究部】

児童及び職員の実態の整理、改善策の提案

【研究広報部】

研究の進捗状況や児童の実態
教室や普通の授業の工夫を校内に周知

校内研究通信 第4号



【研究協議 記録】

視点①「楽しい授業の展開にせざるを得ない点について」

「課題を提示する際に、図形の情報を徐々に少なくしていき、児童の「できそう」、「やってみよう」という思いを引き出していた。

・友達と一緒に学習に取り組み、できるだけ少ない情報で図形が書けるように、勝手に取り組む姿があった。

視点②「対向」子供同士の考えをまず、深める授業にせざるを得ない点について

「分度器を使って図形をかけた子がいるよ。」「コンパス・分度器の両方を使ったんだね。」など、子供たちの取り組みの様子が全体に伝わるような教師のつづきがあった。

・練習問題を正しく図形をかくことができないう問題のみだった。それまでできていた児童や、あと少してできそうな児童が混乱してしまっていたのではないかと


校長先生からのご指導

◎子供の活動時間が20分と、十分に確保できていた。活動量を確保することが学ぶ楽しさにつながる。

△教師主導の繰り返し・確認の時間は、必要なかった。子供たちの学ぶ姿勢が変わってしまっ。子供に任せようではないか。

◎「たった1問で定義づけせず、疑問を次時につなげる展開展開がよかった。予想→確認→定義の繰り返しが大切。」

◎低位の児童同士で考えを伝える場面があった。教師はつい、低位と高位の児童をつなげたくなるが、低位の児童が「わからない」を安心して伝えられることが大切。



よい対応（子供同士の考えをつなぎ、深める）とは、

◎授業の目標を達成するためのもの 「できた」「わかった」

◎学習活動が充実するもの 「活動量」「活動の質」

子供の考えを別の子供に投げかけて子供同士をつなげることで、クラスの考えは深まっていく。子供の発表を子供に向けていく状況をつくる。

手立て③ 「楽しい授業」チェックシートの活用

「楽しい授業」を展開するために、児童の活動時間の確保と児童を褒め・期待する声かけが重要であると考えた。そこで、記録し教師が自身の授業を振り返ることができるチェックシートを作成し、実施した。

【チェックシートから見えた成果】

- 「活動時間」の平均時間 32分
- 「声掛け」の平均回数 14回
- 半数以上の授業で「活動時間」25分以上を達成
- 展開の工夫に、個人で設定したテーマを意識した記述があった。
- 授業後の満足度は高い傾向があった。授業準備を十分に行い『楽しい授業』ができていることが分かった。



授業前	楽しみ	5	4	3	2	1	不安
-----	-----	---	---	---	---	---	----

「楽しい授業」を展開するための工夫

	予定 活動時間	実際 活動時間	褒める 声かけ	活動時間を増やす例	褒める・期待する声かけ例
導入・問題	0	0	3回以上	視覚化（貼る、見せる） 問題をタブレットで配付する。	前回の学習をよく覚えていたね。
	1	1	○	問いかける。（今日、何する？）	思いによく気付いたね。
	2	2	◎	前回の振り返りから、問題をつなげる。	今日は前よりレベルアップしているよ。でも、みんなならできるはず。生活と結びつけられたね。
自力解決	10	10	○	ワークシートを用意 具体例（電卓、おはじき、駒盤など）を設定する。	手立てとする方法を選択していたら練習する「おはじきを使うことを考えたんだね」
	15	15	◎	「聞く」ができる環境を作る。 「やり方」を教えられる環境を作る。	理由まで書けそうだね。 聞き方が上手だね。
	20	20	◎		
此後	0	0	○	ペア、3人組で働き合いから、グループ全体へ広げていく。	この考え方をしているグループはいなかったな。
	1	1	○	ノートを見せ合う。	わかりやすい説明だね
	3	3	◎	問いかける（同じは何？ 違いは何？ など？ どうやってた？）	「だって」「もしもしたら・・・」という表現は楽しみたい。
練習問題	3	3	○	ジャンプの問題を用意 （基礎問題3問、ジャンプ1問程度）	さっき学習したやり方が使えているね。
	6	6	◎	レベル別問題を用意する。 問題数を精選する。	さっきノートに書いていてよかったね 良をつけていく。
	9	9	◎		鉛筆の食しか聞かえないな。 「カチカチ」「カチカチ」の音が聞こえるよと分かるね。
まとめ	1	1	○	ノートのめあてとつなげる。	
	3	3	◎		
	3	3	◎		
振り返り	1	1	○	統合・発展の視点を持たせる。	次期、もっとレベルアップした問題に挑戦してもらおうよ。
	3	3	◎	振り返りの視点を示唆する。（どんな方法で学んだか、本時の学習がどこにつながっているか、次に学習してみたいことはどんなことか）	先生も次の学習が楽しみになってきたな！ みんなのノートを見るの楽しみだな。
	5	5	◎		

授業後	楽しい	5	4	3	2	1	不足	ふりかえり
チャイムで 授業を終えた								
								先生が支援した

5 次年度に向けて

本実践において「楽しい授業」が展開できたかを検証する方法に大きな課題がある。児童が「楽しい」と感じているかを見取ることが困難であるためである。そのため、研修を通して職員全員での「児童にとって楽しい授業」と「算数を学ぶ楽しさ」の共通理解をはかり研究を進める必要があると考える。また、児童の実態把握の方法も研究を進める必要がある。研究を進める中で、算数を学ぶ楽しさを感じた児童が、自ら問題や課題を発見し、自然と児童同士で学び合う姿を期待したい。



研修のテーマ

「考え議論する道徳の授業づくり」 ～ 生徒一人一人が自分自身の問題として捉え向き合う授業を通して ～

入間市立黒須中学校

1 研究主題設定の理由

本校は、平成29年度から、学びの共同体：谷井茂久先生(元茅ヶ崎市教育長)を講師として、「学び合い学習」を学校課題研究として取り組んでいる。

「学び合い学習」のねらいとしている、「わからないことがあったら友だちに聴くこと」や「ペアやグループの人と積極的に話し合うこと」が、普段の授業からも自然にできるようになってきている。

また、学校全体の研究により、それぞれの教員が自分の授業を見直す機会となった。「教える専門家」から「学びの専門家」にシフトしている現代の教育では、教師は教える技術や技能だけでなく、学びに関する専門的知識と実践的な見識が求められている。「学び合い学習」の教材研究を行うことで、教員の授業構成や意識の変容も見られ、教員の資質向上の一助となっている。

そこで、生徒及び教員が「学び合い学習」で得た成果に、「思考ツールを取り入れた道徳授業」を加えることにより、今回の道徳教育改訂の基本方針である、『道徳教育を通じて、個人が直面する様々な状況の中で、そこにある事象を深く見つめ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考え、実践できる』ようになるのではないかと考え、この主題を設定した。

2 研究の仮説

- 「学び合い学習」の型を取り入れた授業展開を行うことで、「考え、議論する道徳の授業づくり」ができるのではないかと。
- 「思考ツール」を取り入れた授業展開を行うことで、「考え、議論する道徳の授業づくり」ができるのではないかと。



定期的な授業研究

3 研究内容

- 1 毎時間大切にしたい道徳事業の実践
- 2 学期に一度または二度(各学年1及びあさひ学級)の研究授業・協議会の実践
- 3 道徳部による道徳通信の発行
- 4 部会<授業研究部・環境研究部(調査分析部)による活動
授業研究部：ツール研究・授業研究
環境研究(調査分析)部：研究協議会運営・記録 掲示物・アンケート作成
- 5 各教室に道徳コーナーの設置

4 実施内容

(方針)

- 1 学期・・・道徳教育の基礎・基本や指導法についての理解を深める。
- 2 学期・・・研究授業を積み重ね、授業力を高める。
- 3 学期・・・本年度の反省と課題を基に、来年度の計画を練る。

(実践)

- 4月 3日 第1回 研究推進委員会
 4月 5日 校内研修 計画の確認 各部員、研究授業者の決定
 研究部会(指導案の検討)
- 5月29日 第1回 授業研究 研究協議会
 3年3組 授業者：小林あいり教諭 指導者：村野由佳指導主事
 題材「言葉おしみ」 内容項目：礼儀
 思考ツール：ロールプレイ(役割演技)
- 8月24日 校内夏季研修 指導者：村野指導主事
 8月30日 校内夏季研修(指導案の検討)
- 9月12日 第2回 授業研究 研究協議会
 2年1組 授業者：高柳吾良樹教諭 指導者：村野由佳 指導主事
 題材「冬の使者 マガン」 内容項目：自然愛護
 思考ツール：座標(軸)
- 11月27日 第3回 授業研究 研究協議会 →中止
 あさひ学級 授業者：川野淳一教諭 指導者：村野指導主事
 題材「怒り(ムカムカ)を鎮める」 内容項目：自立
 上記の内容で実施予定でしたが中止→公開授業へ向けて指導案検討
- 12月 9日 公開授業 全学年・全学級で道德の授業を公開
 テーマ：保護者を巻き込んだ授業の展開
 1学年：題材「つりざおの思い出」
 内容項目：節度・節制
 2学年：題材「2通の手紙」
 内容項目：遵法精神
 ・公德心
 3学年：題材「背筋を伸ばして」
 内容項目：家族愛
 あさひ：題材「怒りを鎮める」
 内容項目：自立
- 1月30日 第4回 授業研究 研究協議会
 1年2組 授業者：黒坂杏奈教諭
 指導者：村野指導主事
 題材「2通の手紙」
 内容項目：遵法精神・公德心
 思考ツール：2分法 or スケール法
- 3月 第2回 研究推進委員会および校内研修
 (本年度の成果と反省と次年度の計画)



若手教員による自主的な研修

5 成果と課題

(1) 成果

- ①資料から道德諸価値に触れ、自分自身の経験と重ね合わせながら、考えを発表したり、共有したりできるようになってきた。
- ②他の友達の考えを聴き、一人では考えられない視点から物事を考えられるようになってきた。

(2) 課題

- ①自分の考えを持ち、友だちの意見を尊重できるようにはなってきたが、議論するまでは至っていない。
- ②道徳的判断力は向上してきているので、態度につなげていきたい。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

～児童が主体的・協働的に学び学力を高める授業の実践～



1 はじめに

情報化の進展や人口減少など社会の構造的な変化の中で、より多様化が進む子供たちを誰一人取り残すことなく、その資質・能力を育成することが求められている。学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の充実が図られることが求められる。

本校では、その具現化に向けて、「学び合い」学習の実践を中心に据え、児童が一人残らず主体的に学習に取り組み、協働的に学んでいく授業のあり方について研究を進めている。

2 研究の視点

「算数科を中心とした学び合いの授業の実践」と「学級経営の充実」を通して

- ① 学びの自立…話をしっかり聴く、目標を持ち挑戦し続ける
- ② 心の自立…思いやりと感謝の心を持ちながら協働する、友達や自分の良さに気づき認め合う
- ③ 身の自立…あいさつ、返事、時間を守るとともに学び合いの基盤となる学級の支持的風土を醸成し、学力の向上に結びつける。

3 研究の内容

(1) 「学び合い」学習の推進

① 「学び合い」の理解

- 指導者を招聘し、「学び合い」及び「学び合いの授業」についての理解を深める。
- 先進校等の「学び合い」の授業を視察し、学び合いの授業法についての理解を深める。

② 「学び合い」の実践

- 授業研究会を実施し、学び合いの授業についての理解を深め、校内の授業実践力の向上を図っていく。
- 全学級で「学び合い」の授業を公開し、指導者に指導を受け、学び合いの授業力の向上を図る。



③ 学力学習状況調査の分析

- 全国学力学習状況調査、埼玉県学力学習状況調査、入間地区学力調査等の各種調査を分析し、本校の児童の学力の実態と課題について全職員で共通理解を図るとともに、課題解決に向けて共通実践が図れるようにする。

(2) 学級の支持的風土の醸成→学級力アンケートの実施

① 学級力アンケートの目的

- 「学び合い」を進めていくための土台となる学級内の心理的安全性が確保された学級集団の育成を図るための一手段として実施する。

② 学級力の捉え方

- 支え合う仲間である学級をよりよくするために、子どもたちが共に目標にチャレンジし、豊かな対話を創造して、規律を守り、安心できる環境のもとで協調的な関係を創りだそうとする力。

③ 学級力アンケートの実施方法

- 学級力アンケートを実施する。
- アンケート結果を集計し、子どもたちに見やすいレーダーチャートの形で提示する。
- アンケート結果をもとに、よりよい学級づくりのためにどうすればよいかの話し合いをし、学級の実践目標をつくる。
- 目標に基づいた実践を行い、よりよい学級をつくるための実践力を高める。
- 実践結果をもとに学級力アンケートを実施する。
以降②～⑤を繰り返す。(学期に2回程度)

研究主題

『探求心をもって学習する児童の育成』



～児童の学びをデザインする生活科・社会科の授業を通して～

1 はじめに

昨年度までの2年間、市教委および市教研の委嘱を受け、国語科の授業を通して『読む力を高め、自分の考えや思いを伝えられる児童の育成』に取り組んできた。国語科での授業の進め方の確立（「児童のめあて（共有の課題）」と「発展的な課題（ジャンプの課題）」の2段階）、教育活動の整備（「まなびタイムの活用」「児童朝会等、特別活動の充実」）等を通して、成果を上げることができた。

今年度は、昨年度までの研究を踏襲しつつ、生活科・社会科の授業を通して『探求心をもって学習する児童』を育むための研究に取り組んでいくこととした。

2 研究の概要

(1) 指導力向上に向けて

- ① 一人一研究授業の実施（全体研3回、ブロック研9回）
- ② 校内人材の活用（教員相互の研鑽）
- ③ 授業者のねらいの明確化（指導案への明記）

(2) 探求心をもたせるための授業展開

- ① 単元を貫く学習課題の設定
- ② 学習方法（見方・考え方）を育てる授業展開
- ③ 体験的な活動を取り入れた導入

(3) 学び合い活動の工夫

- ① 思考の可視化（透明ボードの活用）
- ② タブレットの利活用（調べ学習、オクリンクを使用した意見交換）
- ③ 大型テレビによる共有の時間



3 成果と課題

(1) 成果

- 生活科・社会科における単元（授業）の展開の仕方が分かり、指導力の向上を図れた。
- 単元を貫く学習課題を設定することにより、探求心をもって学習する児童が増えた。

(2) 課題

- 共有の課題を充実させ、ジャンプの課題を通した学びが深まるような授業展開の研究が必要である。
- 必要情報を取捨選択し、課題を解決する力を育てる指導法の工夫が必要である。

校内研修

テーマや課題に沿って、自分の考えや思いを言語化できる指導法の研修 ～主体的・対話的で深い学びを目指して～

入間市立藤沢小学校

1 はじめに

本校では、令和3年度より、Q-Uアンケートを活用した意図的・計画的学級経営についての研修を継続している。

その中で、令和4年度より、自分の考えや思いを言語化できる児童を育成するため、「テーマや課題に沿って、自分の考えや思いを言語化できる指導法の研修」をテーマに、国語科の研究も行っている。



2 研究の概要

(1) 研修の仮説

仮説①：藤沢小学校における、読む力・書く力の系統性を明らかにすれば、継続的な指導を行うことができ、児童が自分の考えや思いを書き表し、言語化することができるようになるであろう。

仮説②：効果的な読み取り方、考えや思いの書き表し方を指導すれば、苦手な児童も自信をもって読み取り、言語化することができるようになるであろう。

(2) 仮説に対する手立て

- ①「読む力」「書く力」の系統性をまとめる。
- ②「資料」の効果的な読み取りからの指導法を共有する。
- ③考えや思いの書き表し方の指導法を共有する。
- ④指導法を共有するため、授業研究会を設ける。

(3) 授業研究会

- ①低学年ブロック 指導者：入間市教育委員会教育部副参事 金岡広道先生
・導入を丁寧に行うことで、児童が見通しを持って学習に取り組んでいた。
・めあてとまとめの整合性がとれるようにするとよい。
- ②中学年ブロック 指導者：入間市教育委員会教育部副参事 岡崎公伸先生
・要約をさせるまでの手順をしっかり踏むことが大切である。
・ねらいとするところを児童が理解していたので、さらに話し合いを深めさせてもよかった。
- ③高学年ブロック 指導者：入間市教育委員会教育部副参事 岡崎公伸先生
・導入の説明・事実・解釈・考えを色分けして提示したことは効果的である。
・資料の説明・事実・解釈・考えをそれぞれ話し合うより、1つに絞って話し合った方が効果的である。



3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・授業後の研修会で授業の振り返り、指導者からの助言を共有することで、書く力を身につける指導法を共有することができた。
- ・書く力における指導の系統性を確認することができた。

(2) 課題

- ・目指す児童像や仮説を受けて、手立てをより具体的に、焦点化して授業を実施できるようにする。
- ・「45分間集中して学び続ける授業の創造」を実現する授業展開の定着。

「学び合い」を通して、支え合い、逞しく生きていく子どもたちの育成
～教員間の「学び合い」による継承と深化～

1. はじめに

「これどうやるの?」と周囲に呼びかけ、支えられながら解決しようとする姿勢は、その子がこれから生きていく上で、とても大切なことである。さらに理想としては、呼びかけた子と呼びかけられた子の関係は、一方的な上下関係ではなく、協働的で互恵的な関係であってほしい。昨年度、西武小では、迷い・悩みながらも自分たちなりに考え、協力しながら「学び合い」に取り組んできた。その成果は、子どもたちの中に少しずつ、確かに根付いている。今後も「学び合い」を日々継続していきたい。

2. 研究の概要

本年度の研究計画は、図1の通りである。

昨年度の研究の反省を考慮し、

①職員一人ひとりが研究教科とテーマ(図2)を決め、一人一回授業を行う。

②グループ内(図3)で授業参観・協議を実施する。

③指導案は、授業デザインとして位置づけ、簡略化する。

の3点を本年度の研究の基本方針とし、職員間の「学び合い」の中で一人ひとりの研究テーマを深めることとした。研究の領域が広がったので、「学び合い」や学級経営、各教科の研究に活用できそうな書籍を多数購入した。

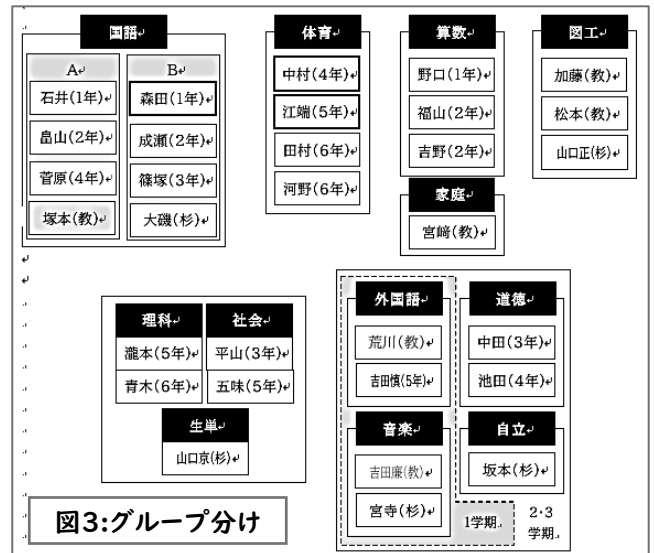
個人テーマに加えて、「聴き合う関係づくり」と「ファシリテーション」も、引き続き全体のテーマとしている。

図1:計画

	月日	項目	参加者	場所
1	5月12日(金)	研究推進委員会①	研究推進委員	校長室
2	5月15日(月)	職員会議③	全職員	職員室
2	5月26日(木)	学校研究	全職員	職員室
3	6月26日(月)	研修日	全職員	教科別研修
4	7月3日(月)	研修日	全職員	「学び合い」映像視聴
5	7月25日(火)	研修日	全職員	学校指導訪問に向けた準備(各自)
6	9月11日(月)	研修日	全職員	教科別研修
7	9月29日(金)	学校指導訪問	全職員	各教室
8月までに指導案を起案、夏季休業明けに返却するので、修正し、再提出(校長・教頭・教務主任) 9月1日(金)市教委に指導案提出、9月8日(金)に市教委から返却されるので、修正し、再提出				
8	11月20日(月)	研究授業・研究協議会① 授業者: 中村 祐樹(体育)	全職員 指導者: 入間市立豊岡中学校 砂田 一校長	授業者教室、体育館
9	12月11日(月)	研究授業・研究協議会② 授業者: 森田 富雄(国語)	全職員 指導者: 入間市教育委員会学校教育課 江崎宏昭指導主事	授業者教室、体育館
10	1月29日(月)	研究授業研究協議会③ 授業者: 江端 俊(体育)	全職員 指導者: 入間市立新久小学校 野口 将茂教頭	授業者教室、体育館
11	3月11日(月)	研究推進委員会②	学年主任	校長室

←図2:職員研究教科・テーマ

名前	教科	テーマ
加藤 裕	図工	巧拙や優劣だけでなく、作品を見る視野を拡げ、多様な感性を認め合う関係づくりを目的とした図工の授業づくり
宮崎 初季	家庭科	生活の支えになろう
吉田 廉人	音楽	自分の考えを伝え合い、試行錯誤しながら創造する「音楽づくり」
松本 麻友	図工	学び合いの活動を通して、豊かな発想や構想を育む授業づくり
荒川 秋子	外国語	外国語による言語活動を通して、コミュニケーション能力を育む授業づくり
石井 文子	国語	ペア学習を中心とした、聴き合う、学び合うことの楽しさを味わえる授業づくり
◎森田 富雄	国語	共に学び合う関係づくりをめざして
野口 真友花	算数	考えを広げ、深める学習集団の育成
畠山 知大	国語	読む、書くことを通した学び合い
福山 愉実	算数	これまでの学習を生かして学び合い、理解を深める授業づくり
吉野 恭平	算数	聴き合うことで、「わかった」が増える学習
成瀬 美緒	国語	「読む・書く」を中心とした学び合い、思考を深める授業づくり
中田 昌平	道徳	自ら考え、意見を聴きながら、学びを深める授業づくり
平山 悠翔	社会	学び合いを通して深め、生活に結びつける授業づくり
篠塚 優子	国語	読み味わう 物語文の学習
池田 直人	道徳	道徳を「学び合い」を通して行う
菅原 倫子	国語	物語文の解釈
中村 祐樹	体育	自ら学び、思考し、表現する力の育成を目指す体育学習～仲間と対話し、自らも対話し学ぶ授業を通して～
◎江端 俊	体育	ゲーム中心の指導
五味 あずさ	社会	学び合いを通して、追究する意欲を育てる授業づくり
吉田 慎太郎	外国語	自分から話し、聴き、気づき、見つける外国語
瀧本 朋佳	理科	自分の経験から考え、他者の意見を参考に、学びを広げ深める授業づくり
田村 優輝	体育	互いの課題を把握し、児童自らがその課題を解決するための授業を構想できる活動を主にした授業づくり
青木 愛永	理科	聴き合うことで、多様な視点から考える力を育む授業づくり
河野 洋一	体育	仲間と共に、体を動かす楽しさを味わえる体育科
山口 京子	生活単元	異学年間における協同作業について
大磯 宏	国語	物語(絵本)の疑問や感想をもとに内容の理解を深める
宮寺 邦太	音楽	学期の練習を通じた学び合い
坂本 悠紀子	自立	適切なコミュニケーションの取り方
山口 正椰	図工	特別支援学級における図工の教材と指導



3. 成果と課題(○成果、△課題)

○子どもの学びを見取り、協議会で発言することができる職員が増えてきた。

○公開授業に向けて、職員一人ひとりが「学び合い」と向き合っていた。

○子どもたちの方から「グループで考えてもいいですか?」や「ジャンプの課題がやりたい。」といった声が聞かれる学級もある。

△個人・グループでの研究になったことで、「学び合い」の授業像を共有することがより困難になった。

△西武小の「学び合い」のスタイルを、どこまで具体的に、どのように定めるか。

研究テーマ 「学びの共同体」スーパーバイザーを招聘しての『学び合い学習』を導入した授業改善

1 主題設定の理由

「令和の日本型教育」における「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現していくうえで、「教える授業」から児童自らが主体的に「学ぶ授業」への質的転換が求められている。そのための有効な手立てとして、今年度本校では『学び合い学習』を取り入れ、授業改善に取り組んでいく。そのうえで、学びの共同体からスーパーバイザーを招聘し、指導助言を有効活用し、学習効果を高めていくことをねらいとして、本課題を設定した。

2 今年度の実践

本校で実施する研究授業の視点

- すべての子どもに学び（学ぶこと）を保障する授業づくり。
⇒全ての子を土俵にあげる。一人一人に学びがある授業づくり
- どの子も一人にしない。（心理的安全性を担保）
⇒わからないことをわからないと言える学級経営、授業づくり

上記視点に基づいた授業実践と研究協議会、指導講評



年月日(月)	科目	単元	授業者
9月4日(月)	国語	詩を味わおう「忘れもの」	橋本 真由美先生
<p>(1) 授業内容</p> <p>めあて:詩を味わおう。 プリント(高橋敏子作「忘れもの」)を配布。5分くらい各自で音読。その後、各自で感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことをプリントに書き込む。 4人グループで意見交換。 疑問がある人は質問。確認させる。→みんなも同じ気持ちで読んでみよう。(2-3人) 全体で子どもの意見を聞く。→各自音読 を繰り返す。</p> <p>(2) 研究協議</p> <p>○グループ協議(グループ4人):「今日の子どもが学んだこと、自分が学んだこと」 ○全体協議:必ず子どもの名前を出す。「全員」1人1発言(1人30秒以内)。「トビックスのみを話す(つかう言葉がない)」「みんなで共有する疑問の発表を促す」 見学者は、児童やグループを巡って見学。特に児童の発言や音読の仕方の変化に注目し、全体協議「誰一人が学んだことを発表しない」旨は20分間の口頭の様子から、山を学びました。」</p> <p>(3) 指導講評</p> <p>○指導者:「学びの共同体」研究協議会スーパーバイザー 橋本 真由美 先生</p> <p>○学び合いは、自身のよみ上げよみ下りをするを繰り返して行うことが、最も新しい見方をスタートさせることが大切。そのことで、新しい発想も同時スタートを切ることができる。 ○個人の研究主題を持つ。自分の取り組みを振り返り、(今日の授業のデザインシート)には、「個人研究テーマ」が記載されていること。 ○このクラスには安心感や平等感がある。安心感と平等感があるから、子どもたちは間違いを恐れずに質問することが出来る。 ○1-2年生はグループではなくペアがいい。3年生以上はグループ。 ○科学的態度の育成。「ペア」ができていないと意味がない。ペアはちゃんと取らせる。 ○「科学・論理の学び」は、「共有」→「ジャンプの探求」として流れ、共有で7-8割の児童が理解している。ジャンプの中で残りの2-3割の児童をひらき出すこと。 ○「ペア」の学びは、関係性によって共有がジャンプになる。 ○「共有」は、「子ども達の語り」→「学び」の繰り返し。 ○「教」についてとは、見ていることの数値が書かない。また、「教」で書いたものにこだわらずに、見ていることをステップとして、考えることを促すことが大切。</p>			

先進校視察で学んだことを全体で共有

3 成果と課題 ※指導者からの講評を含む

(成果)

- 個の学びを大切にする授業を実践したことで、一斉授業からの脱却の理念を全校で共有できた。
- 学習形態(ペア、グループ)の工夫が全学級に浸透し、その形での学習が充実した。
- 3つのきく(聴く、聞く、訊く)を意識させて学び合いを展開できた。
- 各学級で「聞き合い」をベースとした、だれも独りにしない、支え合うが意識できるようになってきた。

(課題)

- 共有の問題、ジャンプの問題を明記した授業デザインを工夫する。
- 学級の実態を踏まえた学び合いの授業づくり。
- 教師のさらなる深い教材研究が必要。教材研究と授業研がセットの研修体制、教科の特性をふまえた学び合いのバリエーションづくり。
- 子どもの見方、授業の見方を学校として定め、焦点授業後の協議会を充実させる。
- 教師の「きく・つなぐ・もどす」の働きかけについて、更なる「聞き合い」を充実させ、学びを深めさせていきたい。

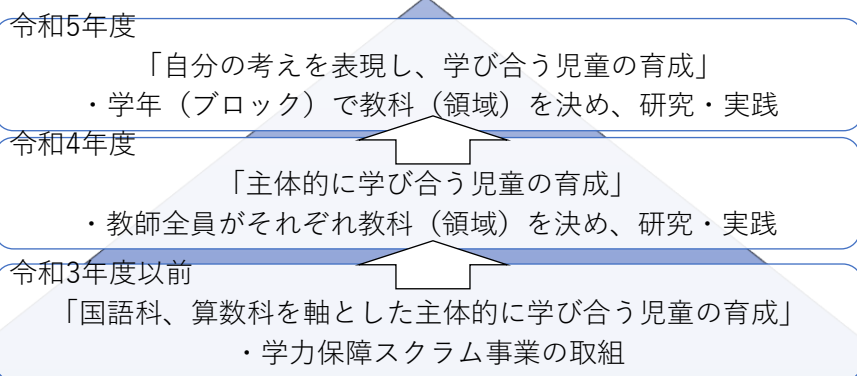


「自分の考えを表現し、学び合う児童の育成」

1 主題設定の理由

本校はこれまで以下のような流れで研修を行ってきた。昨年度の研修を踏まえ、研究がより深まり協力して行えるよう、今年度は学年（ブロック）で教科（領域）を決め、研究を進めることにした。

また、本校児童の実態を踏まえ、「主体的」を「自分の考えを表現」とより具体的に捉え、今年度は研究テーマを「自分の考えを表現し、学び合う児童の育成」とした。



2 主な取組

指導力向上

- ・「学び合い」の研修
- 講師：東金子中学校教頭 水谷大輔先生



学力のベースアップ

- ・家庭学習がんばり週間
- ・親子読書の日



東小スタンダード

- ・「めあて～まとめ」まで授業の流れを統一



3 成果と課題

○成果

- ・学年やブロックで活発に意見交換しながら、協力して研究、実践を行うことができた。
- ・「学び合い」について、研修を行うことで全教員の共通理解を図ることができた。
- ・これまでの研究を踏まえながら、児童の実態の変化に合わせた研修を行うことができた。

△課題

- ・学力の伸びが昨年度と比較して小さい学年があるため、さらなる取組の必要性がある。
- ・若手教員が増えているため、授業力の向上が課題であり、全教職員で校内研修の方向性や取組のバクトルを合わせ、より深く共有する必要性がある。

1 はじめに

本校では、「生き生きと意欲的に学び続ける藤北っ子の育成」を主題に設定し、児童理解を通じた魅力的な授業づくりの研究を行った。また、その際には教育支援システム『結エン』を活用し、児童理解の視点を高め、学級経営力の向上を図ることとした。そのことから、授業改善と教員一人一人の資質向上を目指し、本研究に取り組んだ。

2 研究仮説

- ① 児童が興味や関心を持つような工夫された授業を展開することで、意欲が向上し学びに向かう意識が高まるであろう。
- ② よい学級づくり・学級経営を形成し、さらには授業等で配慮のある個々の児童への適切な対応を行うことで学習への意欲が向上するであろう。

3 研究の取り組み

(1) 藤北学習帳(スタンダード)を活用した授業改善研究主任による提案授業の実施

各年次研修の機会をとらえた授業公開による学び合い(10年次・5年次教員の研究授業を実施し、全ての教員が参加して協議を深める)。

(2) 児童理解を核とした学級経営研究

教育支援システム『結エン』を利用し、全クラスで教育プランを活用して学級経営の研究を行う。

4 成果と課題

(1) 成果

- 学習スタンダードである「フジキタ学習帳」を活用することでスムーズな授業展開を図ることができた。また、『結エン』の教育支援プランを用いることで個に応じた指導を展開することが可能となった。全職員で授業を見合うことにより、経験の浅い教員の授業力向上につながった。
- 教育支援システム『結エン』を全ての担任が活用することで、児童理解が深まるとともに一人一人の困り事の「見える化」につながることができた。さらには個々の状態に合わせた教育プランを選択することで、児童の成長を図ることができた。また、ケース会議を実施するなど、全職員で結エンの教育情報を共有することから効果的な対応をすることができた。



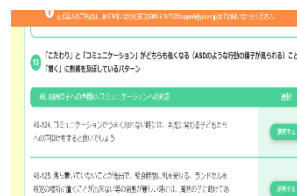
10年次教員による
道徳授業研究協議会



5年次教員による
道徳授業研究会



結エンによる
児童分析



結エンによる
教育支援プラン

(2) 課題

- 年次研修である2名の教員の研究授業を通して教員間の学び合いをすることができたが、もう少し授業者を増やせばさらに深めることができた。さらなる授業づくりの研究を考えていきたい。
- 『結エン』の教育プランを活用することで気になる配慮児童への指導で効果を得ることができたが、プランの無い児童への手立てが不十分であった。また、限定した教育プランを中心とした実践だったので、他のプランの活用をすることでもっと効果を獲得するべきであった。

研究主題

「自ら考え、お互いに伝え合い深め合う児童の育成」 ～学び合いを通して～

入間市立仏子小学校

1 はじめに

本校の児童の実態は、落ち着いていておだやかな児童が多いが、受動的な児童が多い。学力面では、様々な学力調査等において、県・市同等、一部それ以上であるが中位層の児童が多い。知識・技能は高いが、思考力・判断力・表現力は低い。

文部科学省の教育振興基本計画によると、1つには、2040年以降、社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成が必要である。具体的には、自ら持続的な社会を切り拓いていく人材を育成することである。もう1つには、日本社会に根差したウェルビーイングの向上である。つまり、誰もが安心して学べる環境のことである。

「学びの共同体」が提唱している佐藤学氏によると、「学びの共同体」のビジョンには、2つある。①子供1人1人の学ぶ権利を保障すること。(子供が1人残らず学習に参加する)②子供たちが学び合い、教師たちも学び合い、学びの専門家として成長することである。さらに、「学びの共同体」の基本的な考え方が2つある。①学級経営においては、教師と生徒が信頼し合い、柔らかな人間関係を築くこと。②教材研究においては、子供に学びが生まれる授業デザインを作り、そのための教材研究と準備を充分に行う。そして、「共有の課題」(動機づけの課題)から、「ジャンプの課題」(質の高い課題)への授業展開を基本とする、というものである。

本校の児童の実態を改善することと、教育振興基本計画を確実に実践することができるのが、「学びの共同体」の理念であると考えた。そこで、学びの共同体のよさを本校でも取り入れ、授業改善を進めるために、研究に取り組んだ。

2 研修の進め方～学び合いの手法について～

- ①基本はペアで学習をする(男女のペア・45分の授業の中で10回はペアで交流する・ペア同士の机はぴったりつけ、お互いの間に物がないようにする)
- ②課題や中心発問時はグループで学習する(グループで1つの意見にまとめるのではなく、1人1人が他者と関わり、自分の学びを深める)
- ③教師の話し方で聴く態度を育成する(教師の話し方…小さめ、ゆっくり、何度も言わない、言葉の量を減らす)
- ④課題づくりの工夫をする(前半:共有の課題、後半:ジャンプの課題。※ジャンプの課題まで行かなくても、簡単に答えが導き出せない課題を児童に提示してみる)



3 実施内容

- 4月 校内研修にて、学び合い学習の意義、定義、方策を学ぶ
- 7月 授業参観(4年生社会科の動画)
- 8月 学びの共同体スーパーバイザー谷井茂久氏の講演「探求と協同の学びの創造」から学ぶ
- 9月 学びの共同体授業研究会に参加(黒須小・飯能市立飯能第一小)
校内研修にて、情報を共有、今後の取組の確認、
- 10月 学びの共同体授業研究会に参加(飯能市立富士見小・飯能市立加治小)
- 11月 全学年、全教科で授業研究を実施

4 成果と課題

- 児童同士の交流が活発になり、分からないことを友達に聞けるようになってきた。
- グループでの学習、ジャンプの課題を取り入れたことで、児童が学びに対して意欲的になった。
- 職員室で、教師同士が互いに教材研究をする時間が増えた。
- 日々の授業において、継続的にジャンプの課題を設定した授業をつくることに困難さがある。
- 児童の考え(つぶやき)を教師が「つなぐ」「もどす」を効果的に行えるようにするために、日々の実践を積み重ねる必要がある。
- 学び合いの手法を生かした授業改善と学力の相関関係を今後検証する必要がある。

研修テーマ：「自立をめざし、協働を通して貢献できる生徒の育成」

～教員の授業力の向上をめざすと共に、学び合い学習を通して生徒の主体性を育てる～

入間市立豊岡中学校

1 はじめに

本校では、令和3・4年度と入間市教育委員会及び入間市教育研究会の委嘱を受け、「学び合い学習」を中心に据えた研究を行った。その結果得ることができた「成果と課題」を踏まえて、本年度、さらに一歩進んだ「学び合い学習」の実践と充実を目指した。

2 研修の概要 【学び合い学習】

(1) 研修のねらい

「学び合い学習」のさらなる発展のため、教員の授業力向上を目指す。

(2) 研修のテーマ

1年間「個人研究」を実施し、各々のサテライト授業で検証する。

(個人研究テーマは下記の設定したコースから各自が選択する)

■ジャンプ課題の追求 ■ペア・グループ学習の充実 ■ファシリテーター技術の向上

(3) 研修の内容

- ① 学年ごとにグループ(4～5人)となり、互いにアイデアを出し合い、個人研究を進めた。
- ② 1学期に1回目のフォーカス授業(英語)を実施し、谷井先生のご指導の下、全教員で指導法を学んだ。
- ③ 2学期中に全教員がサテライト授業を実施し、可能な限り、互いの授業を参観し合った。(3回の参観目標)
- ④ 年間を通して、学び合い学習を研究している県内外の小中学校へ、可能な限り多くの教員を派遣し、(7校12人)先進校を視察する中で、指導技術を学んだ。
- ⑤ 3学期に2回目のフォーカス授業を実施し、谷井先生のご指導の下、1年の研修の成果を共有する。
- ⑥ 1年間の成果を1人1枚(A4)でまとめ、共有する。



写真① コの字の様子



写真② 授業公開(サテライト授業)



写真③ 授業公開(フォーカス授業)

3 研修の成果と課題

(1) 成果

- ① 学校評価生徒アンケートの結果、「自分から進んで勉強に取り組めた」の項目で「そう思う・少しそう思う」が84%、「授業で自分の考えをまとめたり話し合ったり発表することがよくある」の項目では90%と高評価だった。
- ② 教員集団の協働の意識が高まり、推進力と活気のある教育活動が展開でき、授業力向上につながった。

(2) 課題

- ① 優れた「ジャンプの課題」設定とファシリテーター技術の向上。
- ② 「学び合い学習」における適正且つ効果的な評価法。

4 おわりに

昨年度までに、豊岡中学校区の小学校2校でも、「学び合い学習」の研究が実践されるようになり、この分野でも、小中のスムーズな接続が成し遂げられつつある。今後も、小中の連携を大切にしながら、自校の研究に自信と誇りをもって、推進していきたい。

「共同的な学びを通して主体的・対話的で深い学びを実現する」

1 はじめに

本校は、令和2・3年度文部科学省の委嘱を受け、人権教育に力を入れ、様々な取り組みを行ってきた。その結果、人権感覚が浸透してきている。昨年度は、人権教育の取組を継続しつつ、「協働学習」や「個別学習」を組み合わせた「生徒が主体的に学び合う授業づくり」を行った。その結果、生徒の話し合いスキルと考える力が身につくについて、主体的に話し合う授業が行われていた。

今年度は、学び合い学習を更に深め、ICT を活用した授業を展開し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と研修に取り組んだ。

2 研究の概要

(1) 学習形態の工夫

- ① 授業の中で、4人1組の活動を多く行い、考えを伝え合える場面を取り入れた。
- ② ホワイトボードやタブレットを活用し、グループでの協働を意識して活動させた。



(2) 職員研修の工夫

- ① 学び合い学習の中で、ジャンプ(発展)の課題設定を意識するよう研修を行った。
研修で、職員一人1冊、佐藤 学 著者の「学校を改革する」が手渡され、学び合い学習について理解を深めた。
- ② ICT(タブレット)の活用方法を、ICT 担当主任が指導者として、長期休業中や職員会議の中で、研修を行った。



(3) ICT 機器活用の工夫

- ・授業の中で、「オクリンク」「ムーブノート」「キーノート」「ジャムボード」等を活用し、より深みのある授業を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

授業の中で、4人1組の活動を多く行うことで、周囲の考えを聴いて、授業に取り組む生徒が増えた。また、理解している生徒も聴き合うことで、さらに理解を深めることができている。ICT(タブレット)を活用して、授業を行う職員が増え、ICT(タブレット)を使いこなせている生徒が多い。

(2) 課題

生徒の意欲を高める、効果的な「ジャンプ(発展)の課題」の追求が必要である。また、「学び合い学習」では、聴くことなど、意欲的に取り組んでいる姿がみられるが、基礎・基本の定着に繋がっていない。ICT(タブレット)を使いこなせている生徒が多いが、書く習慣があまり出来ていない。

令和5年度 校内研修の概要

入間市立武蔵中学校



1 はじめに

本校では、「生徒の学力向上」を課題と捉え、『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の工夫 ～学び合いを通じた、生徒の思考をとめない、より良い支援の在り方～』を研究主題として授業改善に取り組んでいる。また、「学びの共同体」の手法をさらに研修し、教師の指導力向上を目指す。

2 具体的な内容

- (1) 夏季休業中に武蔵中学校区(狭山小、宮寺小) 合同で講師として谷井茂久先生を招聘し、「学び合い学習」について研修会を行った。
- (2) 2学期中に全職員が「一人1研究1授業」として研究授業を行い、学び合いを取り入れた授業の研修を行った。
- (3) 研究主任・教務主任を中心に、先進校視察を行い、校内研修に役立てた。

3 年間計画

7月24日	令和5年度 武蔵中学校区3校合同研修会にて、講師として「学びの共同体研究会」スーパーバイザー 谷井茂久先生を招聘し、「探究と協同の学びの創造」のテーマの下、講演を行った。	
9月6日	「学び合い学習」を取り入れるにあたり、市教委学校教育課 江崎指導主事を招聘し、研修会を行った。	
10月10日 ～12月12日	「一人1研究1授業」として学び合いを取り入れた授業研究を行った。学校全体として学び合い学習を取り入れたことは大きな成果である。ジャンプ課題の設定や、生徒の思考を止めない支援などが挙げられた。	

4 研修を通して

○2学期 校内研修記録の感想から

- ・生徒から授業で「できた」「わかった」という声が聞けた回数が増えた。
- ・人とかかわりを増やした活動が入ったため、生徒の表情が4月比べると、明るく笑顔がたくさん見られるようになった。
- ・学び合い学習をはじめたことによって、教師個々が自分の授業を振り返る良い機会となった。

5 研修の成果と今後の課題

本年度の研修を通して、ほぼ全ての授業で「ペアで聴きあう活動」の時間や、「4人組での活動」が定着し始めた。反面、まだ始めたばかりのため、学力調査の結果などで「学び合い学習の成果」が「学力の向上」に結びついていくかなど、検証ができていない。今後、教科の研修ができる時間の確保し、指導者を招聘するなどして研修を進めていく必要がある。今後、研修の中身の充実と研修時間の確保を行い、教師の資質向上とともに、生徒の変容を検証し続けていくことが必要不可欠である。

研究主題

令和7年度の学校統合にむけて ～生徒間、教職員間、地域との交流を通じて～

入間市立西武中学校

1 はじめに

本校は、令和7年度に野田中学校との統合をひかえている。統合にあたっては、様々な課題があることは否めない。

そこで、目前にせまってきている統合の日を生徒や保護者、また教職員も安心して迎えらるるよう、合同研修や交流・連携の実施、共有・整備することを目的に準備を進めた。

2 西武中・野田中 中中合同研修会

第1回 7月28日(金)

- ・今後確認すべき内容の洗い出し
- ・設備及び備品等の情報共有
- ・備品等の取捨選択
- ・今年度、来年度の計画の確認



第2回 12月25日(月)

- ・各学校の状況把握
- ・令和6年度からできることは…
- ・統合後(令和7年度)の計画の立案
- ・各教科シラバスの作成、年間指導計画の確認
- ・各領域の令和6年度当初職員会議資料の検討



3 本校での取り組み

【生徒間交流】

- (1) 生徒間交流…現1年生の交流(学期に1回)
- (2) 合同部活動…合同練習&練習試合の実施
- (3) 西武地区合同音楽交流会…西武中、野田中、仏子小、西武小の4校で実施

【教職員間の交流】

- (1) 生徒指導担当合同検討会議…学校のきまりなどについて
- (2) 生徒会担当合同検討会議…生徒会本部役員、学校行事などについて
- (3) 中中統合推進会議…月1回、校長、教頭、教務主任、教育委員会による確認

【地域との交流】

- (1) 学校運営協議会…統合後の制服等について
- (2) 入間市学校統合委員会…統合にむけた地域の方との意見交換・協議

4 成果と課題

学校統合にむけて課題は様々であり、組織的に検討・対応していくことが大切である。また、子供たちが、事前の交流等を通じ、スムーズな接続・連携のもと、安心して統合を迎えられるようにしたい。来年度は、準備の最終年度となる。あらゆることを想定した準備を進めていく。

1 はじめに

本校の生徒は、県学力・学習状況調査の質問紙の回答状況によると、自己肯定感を持つ割合が比較的低い状況が見られる。その原因として、コロナの影響もあり生徒同士の深い関わりの少なさが考えられる。しかし、本校では「学び合い」学習を取り入れており、生徒同士の交流の機会が少ないわけではない。また、人間関係で悩んでいる生徒も多くいる。このことを踏まえ、今年度は、特別活動の研修を軸に人間関係作りに力を入れた。

2 研究仮説

人間関係づくりや話し合い活動を充実させれば、集団の中で、自己の良さ、他者の良さを見つけ、自己・他者の良いところを認められる生徒になるだろう。

3 今年度の実践

(1) 令和5年7月24日(月)

演題：「QU 学級集団アセスメントを用いた支援の展開」

講師：作新学院大学女子短期大学部 准教授 矢野 善教 先生

- ・事前に矢野先生に本校のQU データをお渡しし、学年・クラスごとに分析していただいた。
- ・分析結果をもとに、教員全体へのご指導をいただき、その後学年で共通理解を図った。



全体へのご指導



エンカウンターを实践

(2) 令和5年8月24日(木)

演題：「中学生の人間関係づくり」

講師：入間市教育センター兼児童発達支援センター

指導主事 大館 信浩 先生

入間市教育センター兼児童発達支援センター

心理専門相談員 山中 徳子 先生

- ・ソーシャルスキルトレーニング「夏休み SST 集中講座」
- ・ソーシャルスキル教育「アンガーマネジメント」
- ・構成的エンカウンター「エクササイズ5種」

4 成果と課題等

(1) 成果

- ・学年のすべての学級で同じソーシャルスキルトレーニングを夏休み明けに行い、学年内で1本の授業を創り上げていくという一体感があり質の高い授業が展開できた。
- ・QU テストの分析により、2者相談等に生かすことができた。

(2) 課題

- ・人間関係が良好になってきたのをどのようにみとるか。

(3) 今後の取り組み

- ・各学期に1度は1本の題材を研究し(学年内)、特別活動の授業を展開する。
- ・各学期に1度アンケートを実施し、研修の効果を測定していく。

1 はじめに

本校では6年前より「学びあい」について研修を進めており、令和元年に研究発表を行っている。これを継続して研修を続け、本年度も学びの共同体研究会スーパーバイザーを努めている方を講師として招いて研修を行うことから始めた。

学校の現場は、教科指導の他に各行事や部活動。また、生徒指導など多忙な環境下であり、ここに更に研修を加えることは更に忙しさに拍車を掛けることになりかねない。そこで、本校教頭、水谷大輔先生が「カジュアル研究授業」・「フォーカス研究授業」を考案し、各教科・全教員が取り組んだ。「負担なく研修の量を増やし、質を高め合う。」ことをねらいとし、本年度の指導訪問でその成果を検証するというものであった。まだまだ課題はあるが、次年度の研究に向けて、更に研修を進めていきたい。

2 研修の実践

6月	「学び合い」の授業を公開「学び合い学習」の研修を進める。講師 馬場宏顕先生 3校時・4校時の授業を「学び合い学習」として公開し、5校時を1クラスのみ焦点授業として馬場梢吾教諭(社会科)が研究授業<フォーカス研究授業>を行った。研究協議にて、講師より「学び合い学習」について指導助言を頂いた。
6月 ～1月	「学び合い」先進校視察研修 市内先進校 黒須中 市外関東圏 横須賀野比中、牛久市第一中
9月 ～2月	「カジュアル研究授業」全教科・全教員(11月 指導訪問にて成果を研修。)
<カジュアル研究授業> だれが；全員 いつ；先生が自由に決める 指導案；作成しない 見学者；空き時間 研究協議；感想をメモで集約、もしくは放課後等で15分程度座談会とする。	
<フォーカス研究授業> だれが；特定の先生 いつ；年1～2回 指導案；デザイン案 見学者；全員 研究協議；授業後にグループ協議。外部指導者を招き、講義・指導を頂く。	

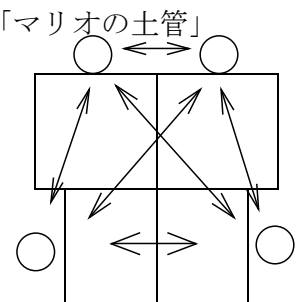
3 成果と課題

(1) 成果「研修により学んだ事」

「学び合い」 主体的・対話的で深い学びは、一斉授業・知識注入型授業では成立しない。

- ①板書をなくす・減らす。 黒板を写す時間は学びではなく作業。
- ②教師の説明を減らす。 すぐに課題を与え小グループとする。この2点を意識する。

- ・生徒が学ぶことは、知識・技能だけでなく「目に見えない力＝非認知能力」を学ぶ。交流を通して、学び方、粘り強さ、主体性、社会性、聴く力を学んでいく。
- ・「まずひとりで」は不要。いきなりグループが良い。
- ・課題を渡したら、すぐ学びに取り組みさせる。
- ・「自分から聴ける子」を育てるのが理想。しかし、「聴けない子に関わってあげられる子」を育てる。
- ・隣のグループの子に聞くという行為は、自分のグループのメンバーを見捨てることに等しい。
- ・机隊形は「マリオの土管」で校内統一。



(2) 課題「教師側の学びあいのスキルの向上」と「生徒側の学びのルールの徹底」が今後も更に必要である。多忙な業務の中であるが、より効果的な研修の方法を工夫することで、無理なくお互いが高められる研修が進められる手立てを考察したい。

「心豊かで、主体的に学び合う児童・生徒の育成」

～ 9年間の学びの連続性を通して ～

入間市立上藤沢中学校

1 はじめに

本校では、小中一貫教育の研究を継続しながら研修を進めてきた。また、昨年度はICT機器を活用した授業実践と発表を行った。今年度は、「学び合い」を取り入れた授業を展開し学力向上を図るため、指導者を招くなどの研修を通して学んでいく。

2 本年度の研修課題

- (1) 確かな学力の定着「生徒が主体的に学び合う授業づくり」
 - ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを継続・発展させる。
 - ・基礎・基本の定着を図るために家庭学習を充実させる。
 - ・ICTを活用した授業の工夫改善。
 - ・学び合いを取り入れた授業の工夫改善を図る。
- (2) 心豊かな生徒の育成
 - ・生徒一人一人が自己有用感・達成感を持てる学年学級経営を図る。
 - ・教育相談体制の充実を図り、生徒理解を深め、指導・援助に努める。
 - ・基本的な生活習慣の徹底(あいさつ・時間・清掃)と積極的な生徒指導に努める。
 - ・体験学習・ボランティア活動を推進する。
- (3) 小中一貫教育の推進「小中9年間を通した児童生徒の育成」
 - ・生活、学習スタンダードの確立を図り、生活をつなぐ。
 - ・小中の円滑な接続に向けた児童生徒間・教師間の交流を推進し、学校間をつなぐ。

3 実施内容について

- (1) 確かな学力の定着「生徒が主体的に学び合う授業づくり」
 - ・指導者を招いて、「学び合い」についての研修を行った。その後、一人一回の授業を目安に校外から指導者をお呼びして研究授業を実践した。
- (2) 心豊かな生徒の育成
 - ・生徒の情報の共有と、個別の対応を様々な視点で考えられるように、生徒指導部会と教育相談部会を併合して実施した。
- (3) 小中一貫教育の推進「小中9年間を通した児童生徒の育成」
 - ①職員間での研修
 - ・上藤沢中学校校区の小中連絡会の実施
 - 6月22日(木) 中学校の授業公開及び情報交換と全体会
 - 8月21日(月) 講演「不登校生徒・保護者に対する実効性のある関わり方」
 - 1月24日(水) 小学校の授業公開および次年度に向けての方針決定
 - ・小学校から中学校、また中学校から小学校への定期的な乗り入れ
 - ②児童生徒間の交流
 - ・6年生対象の中学校一日体験入学の実施
 - ・中学生による小学校への挨拶運動実施
 - ・中学校吹奏楽部による小学校の演奏会実施

4 成果と課題

生活・学習規律が守られており、小中一貫教育の取り組みにより、小学校から継続的に指導してきた成果として考えられる。今後はICTの活用に限らず、学び合いを取り入れた授業の展開、小中一貫教育による連続性を活かした学力の向上をすすめ、社会に貢献できる児童生徒の育成を目指していきたい。

校内研修「主体的・対話的で深い学びの研究と実践の推進」

入間市立東町中学校

1 はじめに

本校では、令和3・4年度入間市の委嘱を受けて「主体的・対話的で深い学びの」研究と実践を計画的に進めてきた。今年度も引き続き、昨年度までの研究成果を活かしながら、本校の課題となっている生徒の自己肯定感や非認知能力の育成を図るための取組を進めてきた。

2 本年度の取組

- ・校内研修 7月21日(金)
学び合い学習講演会
講師 入間市教育委員会 指導主事 江崎 宏昭 様

- ① 教員の役割の明確化 ファシリテーターとは
- ② ジャンプ課題
- ③ タブレットと学び合い
- ④ 黒須中学校フォーカス授業の実践事例と演習



- ・校内研修 9月25日(月) 10月30日(月)
県学力学習状況調査の分析

- ① 学習状況調査「国・数・英」の分析
- ② 質問紙調査の分析
- ③ 分科会に分かれて方策の検討
- ④ 非認知能力の育成に関することの分析
(各学期の重点として具体的に提示し実践する)



- ・一人一回の研究授業の実施

外部から指導者を招聘し、入間市として取り組んできた学力向上の策(「授業分析12の視点」等)を踏まえ、ICT機器の活用の実践をもとに「一人一研究授業」を行い、学び合い学習の個々の教師の授業力の向上を図った。実践後には、成果と課題をまとめ、効果の検証に取り組んだ。

3 成果と課題

【成果】

- ・学び合い学習を通して、生徒が自分の意見を積極的に発言できるようになり、自らの学びを深める生徒が多くなってきた。自己肯定感を高めることにつながった。
- ・一人一研究授業の実施により授業改善の良い機会となった。
- ・ICT機器を各教科で工夫して取り入れ、教員側のスキルの向上につながった。
- ・アンケートの結果から 自己肯定感の高い生徒の多くは、学級や生徒会活動、各行事、部活動等で活躍している生徒が多かった。

【課題】

- ・ICT機器を活用するにあたり、使用ルールの徹底や管理体制の在り方を生徒と共に見直していく。
- ・教員側のICT機器に対する研修時間の確保がなかなか難しい。
- ・実践結果を検証し、学校全体で取り組める活動を目指していく。

令和5年度 入間市のタブレット活用推進について

タブレット授業活用研究委員会

1 はじめに

入間市では国のGIGAスクール構想(※)を受け、令和3年2月に全児童生徒に学習用タブレット端末を整備した。令和の日本型学校教育の実現に向け Society5.0 時代にふさわしい学校の実現に向け、様々な教育改革が進む中、ICTの活用は必要不可欠となった。これまでの実践とICTとを最適に組み合わせ、子供の資質・能力の育成を目指すことが求められている。

※GIGAスクール構想とは、「多様な子供たちを誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学びを全国の学校現場で持続的に実現させるために、児童生徒1人1台端末を前提とした高速大容量の通信ネットワークを整備する」ものである。

2 入間市のタブレット活用推進について

入間市では、GIGAスクールで導入されたタブレット端末の活用を「教員の授業改善」に生かし、教員の資質・能力を向上させることにより子供たちの学力向上を目指している。今年度は「ICT+学び合い学習」をテーマに教職員向けの研修を行った。入間市の子供たちが主体的に社会で活躍・貢献し、豊かな生活を送ることができる人材に育てることが目的である。そのために、タブレット端末を有効活用し、協動的な学びを深めることができるように研究に取り組んでいる。



3 今年度の活動内容（概要）

(1) 設置目的

- ・タブレット端末を効果的に活用し、教員の授業改善を図るための研究をする。
- ・校内でタブレットを活用して授業を推進する教師の育成を図る。

(2) 委員会について

- ・タブレット端末の効果的な活用を各自で実践し、活用事例を共有する。
- ・Googleの活用を通して学校間の交流を行う。

4 活動記録

- (1) 第1回研究委員会 令和5年9月20日(水) 入間市教育センター
・今年度の活動方針 ・各校の事例紹介・共有 ・活動計画

- ・職員会議資料や日報・週報など校内でペーパーレス化が進んでいます。
- ・ノートを使用せずに、タブレットのみで授業を行ってみました。
- ・タブレットを校外に持ち出して活用しました。児童は撮った写真を使って発表をしました。
- ・Google フォームでテストをつくってみました。児童生徒・保護者アンケートにも活用しました。
- ・ミライシードを活用して、作品の評価や振り返りなどに活用しています。
- ・e ライブラリで欠席の生徒に課題の指示や配布をしています。



- (2) 第2回研究委員会 令和5年12月5日(火) 入間市教育センター
「ICT活用研修会」に講師補助として参加(講師: マスチャンネル 渡辺様)
◎Google フォームの活用の仕方を中心に先生方の研修をサポート



- (3) 第3回研究委員会(予定) 令和6年2月下旬
・事例報告会 来年度に向けて

令和5年度 タブレット授業活用研究委員会

【委員長】

藤沢小学校 校長 加藤 公章

【委員】

豊岡小学校	教諭	大野 聡	藤沢中学校	教諭	市川 怜楠
藤沢小学校	教諭	平野 里奈	黒須中学校	教諭	高柳 吾良樹
仏子小学校	教諭	長澤 衛	野田中学校	教諭	滝本 将大

【担当】

入間市教育委員会 指導主事 岩田 浩一

令和5年度 入間市外国語教育について



外国語研究委員会

1 はじめに

本研究委員会による平成29年度の意識調査では、小学校の先生方の多くが英語指導に不安を抱いているという結果が出た。その不安となっている要因は、主に自身の英語力に関わること、指導に関わることである。

昨年度は、こうした先生方の不安となっている要因を少しでも解消していきたいと考え、授業準備や研修準備に係る負担軽減策について、さらには先生方の負担軽減、不安軽減の一助となるよう研究した。

令和5年度は、「外国語教育ブラッシュアップ研修会」とし令和5年度 埼玉県学力・学習状況調査の分析をおこなった。「領域、観点、問題形式別正答率一覧」と「問題別集計結果」より本市は【話すこと〔発表、やり取り〕】の領域が伸び悩んでいることがわかった。よって、【話すこと〔発表、やり取り〕】の領域での、児童生徒の資質能力を伸ばすアクティビティの研究おこなった。

2 活動記録

- (1) 第1回研究委員会 令和5年12月4日(木) 入間市教育センター
 - ・今年度の活動方針
 - ・活動計画の作成と役割分担
- (2) 第2回研究委員会 令和5年1月23日(火) 入間市教育センター
 - ・アクティビティの研究・作成
- (3) 第3回研究委員会
 - ・アクティビティの提出(データにより)

3 児童生徒の資質能力を伸ばす研究

(1) 【話すこと〔発表、やり取り〕】の目標

<話すこと[やり取り]の目標>

- ・関心のある事柄：簡単な語句や文を用いて即興で伝え合う。
- ・日常的な話題：事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする。
- ・社会的な話題：考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合う。

<話すこと[発表]の目標>

- ・ 関心のある事柄：簡単な語句や文を用いて即興で話す。
- ・ 日常的な話題：事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話す。
- ・ 社会的な話題：考えたことや感じたこと、その理由などを簡単な語句や文を用いて話す。

(2) 児童生徒の資質能力を伸ばすアクティビティの研究【話すこと〔発表、やり取り〕】

1	「ウインクキラー」ゲーム	Small talk を活用したアクティビティ
2	「夢の旅行」を企画しよう	「夢の旅行」を企画し、グループでプレゼンテーション
3	EVOLUTION GAME (進化ゲーム)	どの言語材料(文法)や簡易的な会話活動でもできる活動
4	how to ビンゴ	Key sentence を使ったビンゴ
5	「夢の旅行」を企画しよう	スピーチ原稿を書くときのポイントを理解し、自分の考えをもとに、スピーチ原稿作成
6	Program7 の Retell	写真や絵を見て、ストーリーの内容を相手に伝える

★ねらい

- ・ 児童生徒の興味や関心をひく単元の目標を提示し、そこに至る道筋を示すことで、各授業での活動に主体的に取り組めるようにする。
- ・ スモールステップを踏みながら、単元目標を達成するための力を徐々に身につけられるようにする。

(3) 研究成果の作成と配布

先生方の教材研究や授業展開に生かしていただくため、全小学校に単元指導計画ならびに各授業の展開例を印刷したものを配布いたします。

ENGLISH

令和5年度 外国語研究委員会

委員長	東町中学校	校長	伊藤 浩二
委員	狭山小学校	教諭	小本 翔
委員	西武小学校	教諭	菅原 倫子
委員	藤沢中学校	教諭	小澤 文哉
委員	東金子中学校	教諭	小林南海子
委員	上藤沢中学校	教諭	岩瀬 友宏
担当	入間市教育委員会	指導主事	白井 圭



令和5年度 確かな学力を育成する入間市の教育について

学力向上推進委員会

1 学力向上推進委員会について

(1) 目的

本市の子どもたちの課題を明確にし、一人一人を確実に伸ばし、確かな学力を育成するための指導方法を研究する。

(2) 今年度目標

「学びのスタンダード6」の作成

(3) 今年度研究内容

「学びのスタンダード」1～5を踏まえ、より主体的・対話的で深い学びを実現するために「学びあい学習」についての基本の確認とジャンプの課題の具体的な視点を示す。

2 活動記録

(1) 第1回委員会 令和5年11月21日(火) @教育センター

・研究内容の検討 ・研究計画

(2) 第2回委員会 令和6年1月24日(水) @教育センター

・研究内容の検討 ・リーフレット原案の作成

(3) 第3回委員会 令和6年2月22日(木) @教育センター

・リーフレットの校正

3 「学びのスタンダード6」の活用について

「学びのスタンダード5」(データ)を各学校に配布することで、令和6年度からの活用を図る。

4 令和5年度学力向上推進委員会 委員

委員長	仏子小学校	校長	田邊 玲 先生
委員	宮寺小学校	教諭	土屋 倍之 先生
	藤沢南小学校	教諭	山崎 宏樹 先生
	扇小学校	教諭	飛澤 良太 先生
	豊岡中学校	教諭	伊藤 慶祐 先生
	武蔵中学校	教諭	鈴木 源也 先生
	西武中学校	教諭	和合 秀昭 先生
事務局	学校教育課	指導主事	江崎 宏昭

5 入間市の学力の状況（埼玉県学力・学習状況調査より）

正答率 同学年における昨年度との比較												
昨年度		小4		小5		小6		中1		中2		
		国語	算数	国語	算数	国語	算数	国語	数学	国語	数学	英語
	入間市	58.6	60.9	52.4	60.4	61.3	58.7	57.0	59.2	55.2	52.5	55.2
	県	62.1	63.0	56.2	63.0	63.8	59.8	58.8	57.7	57.1	52.7	59.0
	差(A)	-3.5	-2.1	-3.8	-2.6	-2.5	-1.1	-1.8	1.5	-1.9	-0.2	-3.8
		↓		↓		↓		↓		↓		
今年度		小5		小6		中1		中2		中3		
		国語	算数	国語	算数	国語	数学	国語	数学	国語	数学	英語
	入間市	60.8	62.8	59.4	54.2	63.4	57.3	60.7	60.6	53.8	60.6	48.4
	県	62.7	63.0	60.8	56.5	63.8	56.4	60.2	59.0	55.5	59.0	50.4
	差(B)	-1.9	-0.2	-1.4	-2.3	-0.4	0.9	0.5	1.6	-1.7	1.6	-2.0
県との差の変化(B-A)		1.6	1.9	2.4	0.3	2.1	2.0	2.3	0.1	0.2	1.8	1.8
* 改善したのは11項目		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

無解答率 同学年における昨年度との比較

		小4		小5		小6		中1		中2		
		国語	算数	国語	算数	国語	算数	国語	数学	国語	数学	英語
昨年度	入間市	8.9	5.3	5.0	5.2	3.9	4.5	4.1	8.5	2.1	7.0	3.8
	県	7.5	4.1	3.9	4.3	3.8	4.6	3.5	7.9	2.5	7.1	3.4
	差(A)	-1.4	-1.2	-1.1	-0.9	-0.1	0.1	-0.6	-0.6	0.4	0.1	-0.4
		↓		↓		↓		↓		↓		
		小5		小6		中1		中2		中3		
		国語	算数	国語	算数	国語	数学	国語	数学	国語	数学	英語
今年度	入間市	4.5	5.0	4.7	7.7	1.7	5.9	4.1	8.5	3.8	4.4	3.0
	県	2.4	4.0	2.9	5.6	1.3	5.8	3.5	7.9	2.8	4.2	2.1
	差(B)	-2.1	-1.0	-1.8	-2.1	-0.4	-0.1	-0.6	-0.6	-1.0	-0.2	-0.9
県との差の変化(B-A)		-0.7	0.2	-0.7	-1.2	-0.3	-0.2	0.0	0.0	-1.4	-0.3	-0.5
* 改善したのは1項目		○										

記述式正答率 同学年における昨年度との比較

		小4		小5		小6		中1		中2		
		国語	算数	国語	算数	国語	算数	国語	数学	国語	数学	英語
昨年度	入間市	10.7	17.7	24.9	15.4	27.4	5.0	49.7	33.9	52.9	55.2	59.8
	県	15.9	22.4	34.9	14.5	37.5	5.7	51.1	35.9	53.4	55.5	62.3
	差(A)	-5.2	-4.7	-10.0	0.9	-10.2	-0.7	-1.4	-2.0	-0.5	-0.4	-2.6
		↓		↓		↓		↓		↓		
		小5		小6		中1		中2		中3		
		国語	算数	国語	算数	国語	数学	国語	数学	国語	数学	英語
今年度	入間市	17.2	30.4	27.0	21.5	43.2	47.9	53.2	31.0	54.2	48.2	22.9
	県	24.8	35.8	37.5	29.8	44.5	44.8	59.3	35.1	53.2	49.6	26.0
	差(B)	-7.6	-5.4	-10.5	-8.3	-1.3	3.1	-6.1	-4.1	1.0	-1.4	-3.1
県との差の変化(B-A)		-2.4	-0.7	-0.5	-9.2	8.9	3.8	-4.7	-2.1	1.5	-1.0	-0.5
* 改善したのは3項目		○ ○ ○										

家庭学習時間（土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか）

同学年における、昨年度と今年度の比較

		小4	小5	小6	中1	中2
昨年度	入間市	22.7	23.0	22.3	36.6	34.1
	埼玉県	24.1	25.6	25.9	39.5	42.0
	差(A)	-1.4	-2.6	-3.6	-2.9	-7.9
		↓	↓	↓	↓	↓
今年度	入間市	20.5	18.5	32.9	31.9	42.3
	埼玉県	24.9	23.7	35.1	37.8	47.7
	差(B)	-4.4	-5.2	-2.2	-5.9	-5.4
県との差の変化(B-A)		-3.0	-2.6	1.4	-3.0	2.5
				○		○

学級の落ち着き（（前学年の）学級は落ち着いて学習する雰囲気がありましたか）

同学年における、昨年度と今年度の比較

		小4	小5	小6	中1	中2
昨年度	入間市	78.4	73.3	74.0	72.6	63.3
	埼玉県	79.6	76.1	73.0	75.5	72.3
	差(A)	-1.2	-2.8	1.0	-2.9	-9.0
		↓	↓	↓	↓	↓
今年度	入間市	76.3	70.8	75.8	68.5	75.2
	埼玉県	76.0	73.2	71.5	71.7	77.6
	差(B)	0.3	-2.4	4.3	-3.2	-2.4
県との差の変化(B-A)		1.5	0.4	3.3	-0.3	6.6
		○	○	○		○

* 全体的に良くなっている。

聴く力（先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができますか）

同学年における、昨年度と今年度の比較

		小4	小5	小6	中1	中2
昨年度	入間市	76.9	76.2	77.1	77.1	68.5
	埼玉県	75.1	74.5	74.9	77.2	73.4
	差(A)	1.8	1.7	2.2	-0.1	-4.9
		↓	↓	↓	↓	↓
今年度	入間市	76.7	76.5	83.3	78.5	76.2
	埼玉県	77.3	74.4	79.0	77.7	78.7
	差(B)	-0.6	2.1	4.3	0.8	-2.5
県との差の変化(B-A)		-2.4	0.4	2.1	0.9	2.4
			○	○	○	○

* 小4→小5に課題があるが、その他は上昇している。

協働（前学年で）グループやペアで話し合ったり、意見を出し合ったりする場面がどれくらいありましたか。）

同学年における、昨年度と今年度の比較

		小4	小5	小6	中1	中2
昨年度	入間市	66.8	72.6	65.9	74.3	79.9
	埼玉県	67.6	66.5	67.9	72.0	72.8
	差(A)	-0.8	6.1	-2.0	2.3	7.1



		小5	小6	中1	中2	中3
今年度	入間市	72.6	75.6	78.9	84.3	79.2
	埼玉県	71.5	69.9	73.9	73.4	72.3
	差(B)	1.1	5.7	5.0	10.9	6.9

県との差の変化(B-A)	1.9	-0.4	7.0	8.6	-0.2
--------------	-----	------	-----	-----	------

* 小4→小5、小6→中1で改善。

○

○

○

自己肯定感（自分には、よいところがあると思いますか）

同学年における、昨年度と今年度の比較

		小4	小5	小6	中1	中2
昨年度	入間市	81.6	80.5	80.2	71.3	68.4
	埼玉県	79.9	78.2	77.6	72.7	73.8
	差(A)	1.7	2.3	2.6	-1.4	-5.4



		小5	小6	中1	中2	中3
今年度	入間市	79.7	77.1	77.7	71.0	69.8
	埼玉県	79.0	77.0	76.2	71.9	74.8
	差(B)	0.7	0.1	1.5	-0.9	-5.0

県との差の変化(B-A)	-1.0	-2.2	-1.1	0.5	0.4
--------------	------	------	------	-----	-----

* 中学校で改善が見られた。

○

○

入間市内児童・生徒の体力の現状と課題

入間市体力向上推進委員会

I はじめに

1 研究のねらい

本市の体力向上推進委員会のねらいは、各校の体力向上推進委員会等と連携しつつ、健康で体力・気力にあふれる児童・生徒の育成を図るため、体力などについての実態調査や諸施策を案出し、各校における体力向上のための実践活動の充実強化を図ることにある。

本委員会は、継続的に集積したデータ等を元に、市内小・中学校の児童・生徒の体力の推移を明らかにし、比較と分析を加えることを主な研究として行っている。例年、①新体力テストの集計結果 ②鉄棒運動の技能 ③泳力の調査の3つの領域に焦点をあて、集計データ等から実態把握と分析に取り組んでいる。

今年度は、引き続き感染症拡大防止のため、上記②～③の調査を中止とした。研究の中心を、感染症対策下の体力向上策とし、会報「元気な入間っ子」の発行による学校・家庭への周知を活動の目標とした。

2 研究の経過

第1回委員会 令和5年11月21日（火） 於 入間市立豊岡中学校

- (1) 推進委員会の趣旨並びに昨年度までの活動状況の確認
- (2) 本年度の研究方針の決定（年間活動計画と組織作り）
- (3) 研究の具体策と推進計画
 - ① 会報「元気な入間っ子」第21号発行計画

第2回委員会 令和6年1月18日（木） 於 入間市立豊岡中学校

- (1) 「入間市の学校教育」紀要内容の確認
- (2) 会報「元気な入間っ子」第21号内容の確認
- (3) 本年度の反省

Ⅱ 児童生徒の新体力テストの結果・報告

(1) 小学校

①令和5年度 新体力テスト児童の平均値 ○・×は県平均値との比較

男子									
	項目	握力 (kg)	上体起こ し(回)	長座体前 屈(cm)	反復横と び(点)	20mシャトル ラン(回)	50m走 (秒)	立ち幅と び(cm)	ボール投 げ(m)
1年生	市平均	9.28	12.60	27.95	28.28	21.01	11.58	114.86	8.28
	県平均	9.01	12.27	27.47	27.88	21.09	11.56	116.53	8.04
	比較	○	○	○	○	×	×	×	○
2年生	市平均	10.18	14.96	29.09	31.61	28.56	10.71	128.73	11.20
	県平均	10.59	15.34	29.23	31.97	30.30	10.72	127.80	10.85
	比較	×	×	×	×	×	○	○	○
3年生	市平均	12.59	17.59	30.57	35.45	37.12	10.20	136.84	14.37
	県平均	12.34	17.49	31.14	35.52	37.87	10.18	137.00	13.76
	比較	○	○	×	×	×	×	×	○
4年生	市平均	14.23	19.18	33.56	39.22	44.77	9.72	147.45	18.06
	県平均	14.06	19.18	33.19	39.23	44.69	9.77	145.64	16.80
	比較	○	—	○	×	○	○	○	○
5年生	市平均	15.75	20.69	34.41	42.89	49.67	9.31	155.29	21.00
	県平均	16.17	20.92	35.85	43.02	51.40	9.39	155.05	19.65
	比較	×	×	×	×	×	○	○	○
6年生	市平均	18.59	22.19	37.69	45.41	57.28	8.91	164.45	23.89
	県平均	19.07	22.69	38.04	46.16	59.23	8.93	165.55	22.78
	比較	×	×	×	×	×	○	×	○
女子									
	項目	握力 (kg)	上体起こ し(回)	長座体前 屈(cm)	反復横と び(点)	20mシャトル ラン(回)	50m走 (秒)	立ち幅と び(cm)	ボール投 げ(m)
1年生	市平均	8.75	12.48	30.64	26.98	18.66	11.84	107.95	5.90
	県平均	8.53	11.80	29.98	26.71	17.79	11.87	109.22	5.69
	比較	○	○	○	○	○	○	×	○
2年生	市平均	9.97	14.72	31.11	30.58	22.64	10.97	119.65	7.69
	県平均	10.06	14.82	32.34	30.54	24.14	11.06	119.72	7.43
	比較	×	×	×	○	×	○	×	○
3年生	市平均	11.95	17.26	35.06	33.51	28.97	10.47	131.49	9.01
	県平均	11.79	16.96	34.90	33.82	29.41	10.50	129.96	9.36
	比較	○	○	○	×	×	○	○	×
4年生	市平均	13.80	19.15	37.14	37.54	35.46	9.93	141.26	11.47
	県平均	13.65	18.66	37.46	37.64	35.62	10.04	139.80	11.34
	比較	○	○	×	×	×	○	○	○
5年生	市平均	15.56	19.89	39.16	40.65	40.43	9.59	148.30	13.22
	県平均	16.22	20.14	40.89	41.16	41.87	9.59	149.33	13.29
	比較	×	×	×	×	×	—	×	×
6年生	市平均	19.02	20.91	43.73	43.56	45.35	9.15	156.01	14.85
	県平均	19.10	21.25	43.67	43.62	46.90	9.19	157.13	14.94
	比較	×	×	○	×	×	○	×	×

②考察

表1 埼玉県体力標準値以上の記録となった学年の数

	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ボール投げ	合計
男子	0	0	2	0	0	0	1	0	3
女子	0	1	3	0	0	0	0	0	4
合計	0	1	5	0	0	0	1	0	7

令和5年度埼玉県体力標準値と今年度入間市児童平均値を比較してみると、体力標準値を上回ったのは96項目中7項目で、達成率は約7%であった。昨年度は達成率が8項目だったため、1項目下回る結果となった。特に、握力、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、ボール投げは、1学年も上回る事ができていなかった。新型コロナウイルス感染症の流行時期から、やや制限が解消されつつも依然として、厳しい結果となっている。

下記4種目に関する平成24年度からの入間市平均の推移を見ると、長座体前屈は緩やかな上昇傾向にあり、昨年度急激に下降していた。今年度は、全体的に平均値は上がっているが、県平均を超える学年は半分にとどまった。県の課題であり入間市の重点目標でもある握力とボール投げについては、平均推移で比べるとほぼ横ばいか下降傾向である。20mシャトルランは、令和に入り新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、下降傾向にあった。しかし、県平均を超える学年は少なかったものの、若干ではあるが市平均は上昇した。引き続き、入間市全体で工夫しながら体力の向上を図っていく必要がある。

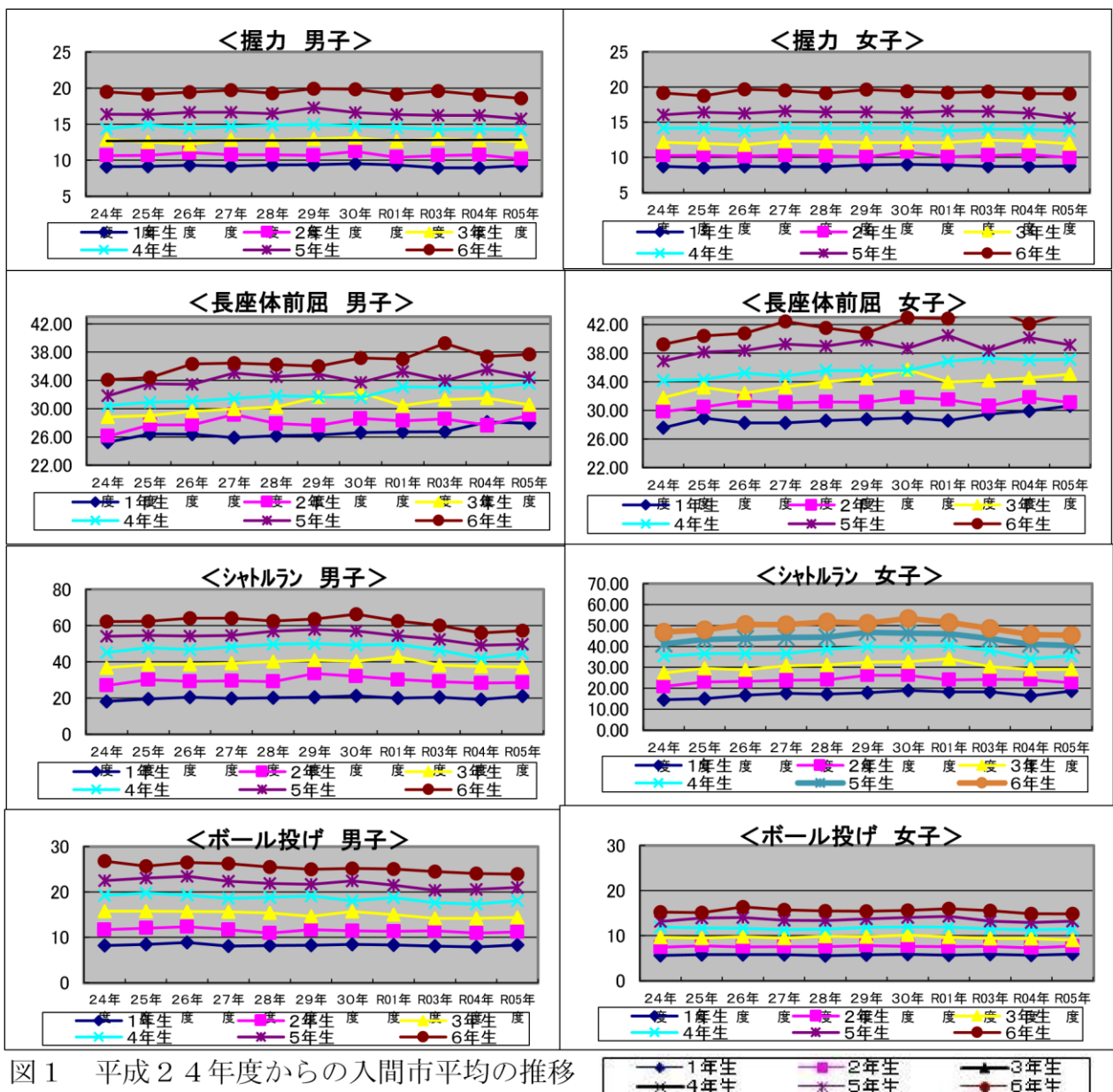
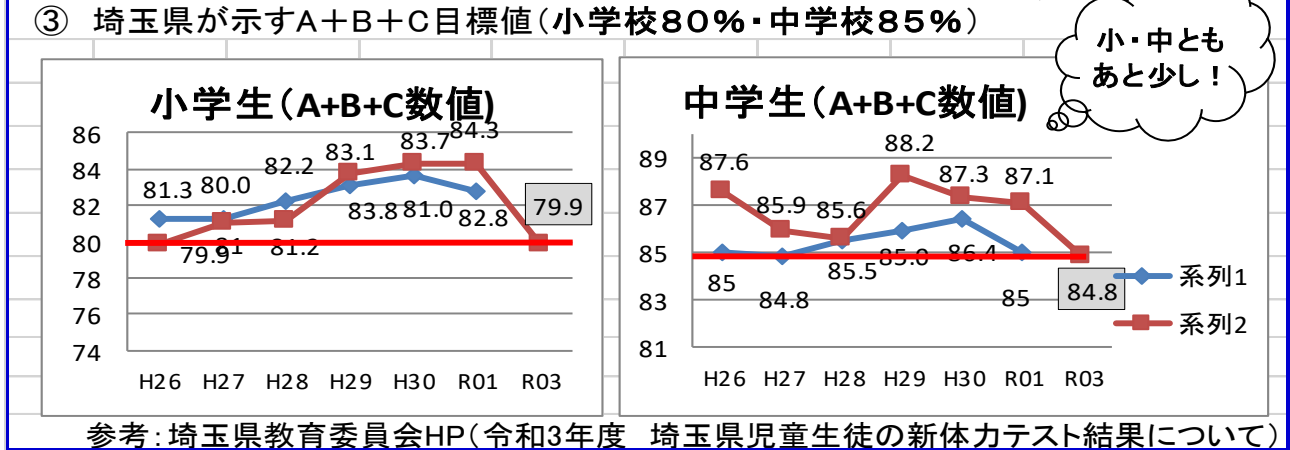
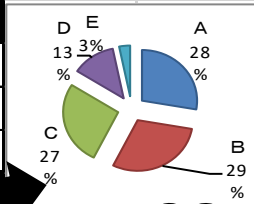
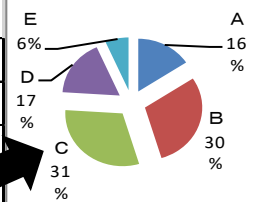


図1 平成24年度からの入間市平均の推移

(2) 中学校		令和5年度入間市平均と埼玉県平均を比較							
①令和5年度 新体力テスト生徒の平均値		○・×は県平均値との比較							
男子	項目	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (点)	持久走 (秒)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ボール投げ (m)
1年生	市平均	24.08	24.68	43.01	47.76	6'55"72	8"42	182.90	18.71
	県平均	23.85	24.76	43.10	48.05	7'06"39	8"55	182.81	17.79
	比較	○	×	×	×	○	○	○	○
2年生	市平均	31.19	28.53	48.51	52.44	6'20"48	7"80	204.30	22.08
	県平均	29.68	28.25	48.09	48.05	6'33"24	7"90	201.91	21.26
	比較	○	○	○	○	○	○	○	○
3年生	市平均	34.85	30.40	52.95	54.14	6'09"98	7"43	214.79	24.93
	県平均	34.49	30.75	52.19	54.71	6'17"98	7"49	216.06	24.25
	比較	○	×	×	×	○	○	×	○
女子	項目	握力 (kg)	上体起こし (回)	長座体前屈 (cm)	反復横とび (点)	持久走 (秒)	50m走 (秒)	立ち幅とび (cm)	ボール投げ (m)
1年生	市平均	22.12	21.68	46.91	45.07	5'03"31	8"95	168.47	12.32
	県平均	21.58	22.13	46.89	44.46	5'07"56	9"07	165.00	11.62
	比較	○	×	○	○	○	○	○	○
2年生	市平均	24.77	24.88	51.78	47.27	4'46"07	8"68	173.79	14.19
	県平均	24.06	24.71	50.25	46.58	4'53"30	8"75	172.42	13.52
	比較	○	○	○	○	○	○	○	○
3年生	市平均	26.14	26.00	54.36	46.82	4'45"83	8"52	175.09	15.22
	県平均	25.57	26.27	53.07	47.47	4'51"61	8"64	175.73	14.64
	比較	○	×	○	×	○	○	×	○

② 令和5年度 新体力テスト 入間市総合評価						
		A	B	C	D	E
小学校	男	14.1%	29.1%	30.9%	17.7%	8.2%
	女	17.9%	31.0%	31.4%	14.6%	5.1%
	全体	16.0%	30.1%	31.2%	17.7%	6.7%
	A+B	46.1%		A+B+C	77.3%	
中学校	男	16.5%	27.6%	32.2%	18.7%	5.0%
	女	39.1%	31.6%	21.1%	6.8%	1.4%
	全体	27.8%	29.6%	26.7%	12.8%	3.2%
	A+B	57.4%		A+B+C	84.1%	



②考察

表3 埼玉県体力標準値との平均値の比較

	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	標準値を上回る数	昨年度
1年男子	○	×	—	×	×	○	×	○	3	4
1年女子	×	×	×	×	×	×	×	○	1	1
2年男子	○	×	○	×	×	○	○	○	5	4
2年女子	×	×	○	×	×	×	×	○	2	1
3年男子	×	×	○	×	×	○	×	○	2	0
3年女子	×	×	○	×	×	×	×	○	2	0

今年度の結果を埼玉県体力標準値と比較してみると48項目中、○16(33・33%)、×31(64.58%)、—1(0.02%)であった。令和4年度は ○10(20.83%)、×38(79.17%)、であった。

長座体前屈、ハンドボール投げの2種目において、多くの学年が県の標準値を上回っている傾向にある。令和4年度時よりも県の標準値を上回っている種目は増えたが、種目の特性によるマスク着用や、人との距離をとる必要性による運動制限の影響は未だに大きいと考えられる。50m走の男子においては、令和3年度から常に良い状態に保つことができている。持久走に関して、どの学年でも県の標準値を超えられていないため、授業での長距離走を充実させるとともに、10月に行われる駅伝競走大会に多くの生徒を関わらせていきたい。

入間市全体を見ると上体起こし、反復横跳び、立ち幅跳びの記録は県の標準値と比べて低い傾向が見られる。3つの種目とも、令和4年度の時から低い傾向にあり、課題となっている。反復横跳びに関しては、授業時に短い時間の中で、横や斜めに動くような運動を取り入れる必要がある。上体起こしについては、スタートの合図の反応速度を上げることや授業の補強運動等で、毎回取り入れて長期的に行い、筋力を向上させていく必要がある。立ち幅跳びについても補強運動の際に、馬跳びなどを取り入れることで仲間と交流しながら、脚力や瞬発力を鍛えることができると考える。1年を通し、運動のアプローチの仕方を変化させながら、生徒が意欲的に取り組める工夫をすることで体力を向上させることができると考える。ここ数年のマスクを着用しての運動や、接触を制限する運動を行っていた期間が長かった影響は大いにある一方、少しずつコロナの影響も緩和されつつある中で、子供たちが力いっぱい運動に取り組み、自らの健康の増進と体力の向上を図れるような働きかけを体育授業を通して行っていきたい。

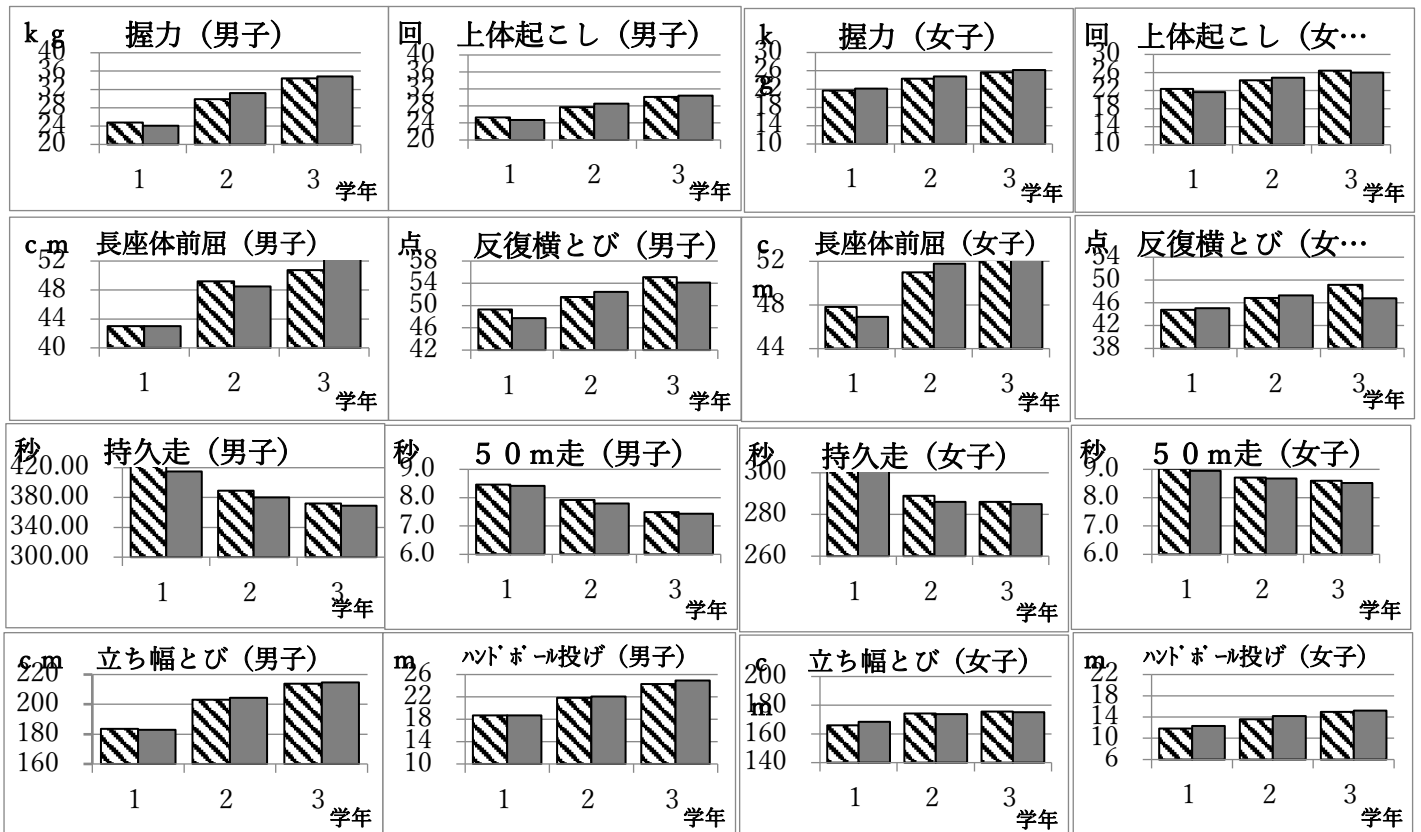


図3 種目ごとの学年別平均値の対前年度比

II 研究のまとめ

1 新体力テストから

(1) 県体力平均値に対して

令和5年度の結果では、入間市内の小学生の県体力平均値が県平均値を上回っている項目数は、48項目中、男子が23項目、女子22項目であった。

反対に下回っていた項目数は男子9項目、女子7項目であった。男子は握力、女子は20mシャトルランが課題である。また、中学生の平均値が県体力平均値を上回っている項目数は、24項目中、男子が18項目、女子は20項目であった。下回った項目は、男子6項目、女子4項目であった。項目では男子は上体起こし、反復横とび、女子では上体起こしが課題である。

小・中とともに、これまでの課題が引き続き解消できていない状況がみられるため、来年度の取組について各校のさらなる工夫が求められる。

(2) 総合評価に対して

総合評価では、埼玉県教育振興基本計画の目標では、A+B+Cの割合を小学校80%、中学校85%以上としているが、本市の小学生は、3・4・6学年の女子がこれに達することができた。中学生では女子が全学年で達することができた。また、平成26年度まで目標としていたA+Bの割合が小中ともに50%以上については、小学校では、1・3・4学年女子が、中学校では、3年生男子と全学年の女子がこれに達することができた。今後も児童生徒の健やかな成長のために体育授業の充実を図っていきたい。

2 今後に向けて

体育は運動に親しむとともに、「健康の保持増進」と「体力の向上」を目指す教科である。授業の充実が体力の向上につながっていく。指導にあたっては、授業時数や運動量の確保、指導や評価の工夫改善を行い、子供たちが一杯運動に取り組む授業を目指してほしい。

感染症拡大防止策を講じた体育授業が展開される中、各学校の先生方は、様々な工夫を凝らして、体力向上策に取り組んでくださっている。一部ではあるが、体力向上推進委員会にて、取組を紹介することができたことが、今年度の最大の成果である。

一昨年度まで行っていた、鉄棒運動、泳力に関するデータを示し、実態把握とその分析を行うことができなかったが、新型コロナウイルス感染状況が終息を迎えつつある中、平常時の教育課程へ戻る時を目指し、しっかりと準備をしていきたい。本研究の結果が、各学校における今後の児童生徒の体力向上策に反映されることを期待している。

令和5年度入間市体力向上推進委員会

委員長	豊岡中学校	砂田 一
委員	藤沢北小学校	三上 聖奈
委員	東町小学校	犬島 未歩
委員	西武中学校	伊藤 貴士
委員	向原中学校	山田 悠平
担当	入間市教育委員会学校教育課	高嶋 裕子

人権教育の充実を図る指導資料作成の取組

～中学校1年生「道徳」の授業実践を通して～

入間市人権教育推進委員会

I 研究のねらい

本委員会では、「児童生徒の当事者意識を育む授業実践を行い、学校における人権教育の充実を図る」という研究主題のもと、道徳の授業の実践を中心に研究を進めてきた。

今年度の研究は、道徳の授業を通して、中学校の内容項目「B-8 友情、信頼」から、教材名『短文投稿サイトに友達の悪口を書くと』を取り上げ、生徒にとって身近な事象から人権感覚の育成を目指したことである。具体的には、「相手の立場を想像したり、その立場になったときに自分だったらどうするかを考えたりする」ことをねらいとして研究授業を行った。研究協議では、人権教育の視点から協議を行うことにより、その成果と課題について議論を深めることができた。

II 研究の経過

	日 程	活 動 内 容
第1回	令和5年 7月14日（金）	今後の活動方針の検討、計画の立案
第2回	令和5年10月 3日（火）	授業実施計画・指導案検討
第3回	令和5年10月31日（火）	授業研究会：向原中（小橋教諭）

III 第1学年1組 道徳科学習指導案

日時 令和5年10月31日（火）

授業者 小橋 弘嵩

1 主題名「情報モラルと友情」 内容項目（B-8 友情、信頼）

2 教材名 短文投稿サイトに友達の悪口を書くと

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

友情はお互いの信頼と敬愛の念を基盤とする最も豊かな人間関係であり、かけがいのないものである。互いの個性を認め、違いを尊重しつつ、高めあえる関係づくりが大切である。時には友達との関係に悩み、傷つくことを恐れ、忠告できないこともある。こうした中でも友情の尊さを理解し、互いの良さを認め、励ましあい、忠告しあえる信頼関係の良さを味合わせたい。自己を大切にしつつ、他者を思いやり、友情が深められるようなかわりを授業の中で触れながら大切にしていこうようにしたい。

(2) 生徒の実態について

本学級では、男女分け隔てなくかかわり交流している様子も見られる。ルールや決まり事を守りながら、学習に取り組む姿が見られ、友人への気遣いや、声掛けなど協力的な部分が見られる。

その反面、ささいなことがきっかけで友達関係が崩れることや、友達関係に対して 悩みや葛藤を抱える生徒も少なくない。また、スマートフォンの普及に伴い、相手の気持ちを考えないやり取りからトラブルに発展してしまう。

そのため、他人事ではなく、自分事してとらえ、これらの悩みを乗り越えて、忠告し あえる信頼関係を築けるようにしていきたい。

(3) 教材について

本教材は、ネット上への悪口の書き込みから「炎上」してしまう話から、真の友情について考えるものである。掃除にしっかり取り組まないイチロウが、ナオコから注意を受けたことから、ネットに悪口を書き込んでしまい、ネット上で「炎上」してしまう。コウタはイチロウの友人であるが、なかなかイチロウへ注意ができない自分自身に葛藤するという内容である。

情報モラルは現代社会において重要視されているが、中学1年生は情報に対する視点や扱いはまだまだ未熟である。これからの情報化社会を生きていくうえで、子供たちが情報を正しく活用しながら、仲間との友情を深め、よりよい信頼関係を構築してことが重要である。小グループでの話し合いや、ホワイトボードに意見をまとめるような、体験的な活動を設定し、言葉だけでなく、相手の表情や仕草から伝わる情報も含めて考えられるような展開とすることで、道徳的価値への理解を深め、ねらいに迫っていく。

4 人権指導上のねらい (普遍的な人権課題「人間の尊厳・価値の尊重」)

SNS の問題点を見抜き、相手の痛みや感情を感知するとともに、自分が人を傷つけず、自他ともにかかけがいのない人間として尊重することができるようになる。

5 人権指導上の留意点

- ・一人一人がかかけがいのない存在として自分自身や友達を大切にしようとする。
(価値・態度)
- ・相手の立場を想像したり、その立場になったときに自分だったらどうするかを考えたりすることができる。(技能)

6 本時のねらい

悩みや葛藤をともに乗り越え、友情を深めていくことの大切さに気づき、互いに励まし合い、心から信頼しようとする態度を育てる。

7 学習指導過程

過程	学習（内容）活動	予想される生徒の反応	人権教育上の配慮（◎） 評価の視点（☆）
導入 5分	1 SNS や誹謗中傷に関するアンケートの結果を見せる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誹謗中傷は相手を傷つけること。 ・ SNS で愚痴を言ったことがある。 ・ 書いている人を知っている。 ・ そういう話を聞いたことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コの字で始める。 ・ 自由に発言をさせる。
展開 35分	<p>2 範読「短文投稿サイトに友達に悪口を書き込むと」を範読する。 ※P122 の 10 行目までにする。</p> <p>3 状況の確認をし、それぞれの立場を考えてみる。</p> <p>4 コウタは大変なことになるぞと思ったのに、どうして「う、うん、そうだね」と言ってしまったのか。</p> <p>5 三人はどうしたらよかったと思うか。</p> <p>6 もしもあなたがコウタの立場だったら、イチロウに忠告する。</p>	<p>コウタ 同意しちゃった。</p> <p>イチロウ イライラしていた。懲らしめたい。</p> <p>ナオコ 悪いのはイチロウだから仕方ない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仲が悪くなってしまうと思ったから。 ・ その場のノリに流されてしまったから。 ・ イチロウにいても聞かぬそうだったから。 ・ 面倒くさいから <ul style="list-style-type: none"> ・ ダメなことはダメという。 ・ ネットには上げない。 ・ 言い方に気を付ける。 ・ 考えて行動する。注意する。 <p>【する】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ネットで炎上してほしくない。 ・ はっきり言うのが友達。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書は配布しない。 ・ 登場人物や関係性をまとめる。 ・ このあとどうなるか予想させる。 ・ 全員幸せじゃない状況を理解させたうえで、どうしたらよいかを考えさせる。 ・ 三角関係があることに気づけるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ イチロウも嫌な思いしてるよ。注意できるの？ ナオコは悪くないじゃんなど補助発問をする。 <p>◎自分がイチロウだった場合、どう思うか考える。</p> <p>◎コウタの立場になって考えることができる。</p>

	告することができ るだろうか。	・悪いことはやらないほうがいいよ。 【しない】 ・いってもわかってもらえない。 ・嫌われるかも。 ・友達じゃなくなるかも。	☆信頼関係の構築には何 が大切か理解すること ができる。
終 末 1 0 分	7 信頼できる友達 関係のために大切 なことを、こころの おとに記入する。	・友達を思うなら言ったほうがいい。 ・喧嘩してもそれを修復できる関係が良 い。 ・正しいことと駄目なことを言ってあげ ることが大切である。	☆「こころのおと」に振り 返りを記述し、信頼関係 について記述できてい る。

V 研究のまとめ

研究協議では、黒須小学校の吉田校長先生より、指導・講評をいただいた。

- ・小橋先生の子どもの関係がいい。指名すると大人しい子も答えられる。クラスには色々な生徒がいるだろうが、先生がよく見ている。
- ・考え議論する道徳になっていた。先生がファシリテーターとして、生徒の話を繋いでいて、役割を果たしていた。
- ・生徒にとって当事者意識があった。「自分だったら」という視点で考えることができていた。ただ、授業ではややソーシャルスキルの側面が強かったので、道徳としてはそこからさらに価値へと深めていけたら、よりよい。

令和5年度 人権教育推進委員会

委員長	黒須小学校	校長	吉田 穂高
委員	藤沢東小学校	教諭	市橋 伸一郎
委員	藤沢北小学校	教諭	木下 萌香
委員	向原中学校	教諭	小橋 弘嵩
委員	黒須中学校	教諭	黒田 潤
担当	入間市教育委員会	指導主事	田中 優人

はじめに

入間市博物館は、来年、30年周年を迎えます。その間、学習指導要領は2度の改訂が行われ、学習内容や指導方法が大きく変化してきました。さらに、令和2年度よりGIGAスクール構想が急速に進み、教育現場のICT化は現在進行形で行われています。博物館においても、そのような時代の変化に合わせた博学連携の授業の在り方が求められています。開館以前より活動を始めた「入間市博物館・学校連携推進委員会（現在の入間市博物館・学校連携事業研究委員会：以下博学委員会）」を中心に、博物館を活用しての授業を支援する取組の充実を目指し、常設展示の効果的な利用や体験活動等の実践を進めるとともに、各学校の教育課程に対応する学習内容やICTの活用についても考えてきました。また入間市では、“狭山茶とふれあう教育”を市の教育行政重点施策としており、博物館においても主に中学生を対象に、日本の“和”の心を体験する青丘庵での茶席体験も実施してきました。以下、今年度の博学委員会の活動概要と、博物館活用授業について述べます。

1 令和5年度 入間市博物館・学校連携事業研究委員会

委員	山田 亮太 (藤沢中学校 校長)	山本かすみ (東金子小学校 教諭)
	戸口裕太郎 (金子小学校 教諭)	相羽 崇史 (野田中学校 教諭)
	鹿山 良寛 (金子中学校 教諭)	
	小田部家秀 (入間市博物館副主幹)	栗原 淳 (入間市博物館指導主事)
事務局	澤田和也館長	津久井浩一主幹 梅津あづさ副主幹

【第1回博学委員会】

実施日 令和5年7月5日(水) 午後3時30分から

会場 入間市博物館会議室

- (1) 澤田館長あいさつ
 - (2) 自己紹介
 - (3) 委員長・副委員長選出(委員会規則第5条により選出)
 - 委員長 山田 亮太委員(藤沢中学校校長)
 - 副委員長 山本かすみ委員(東金子小学校教諭)
 - (4) 協議(委員会規則第6条により委員長が進行)
 - ①令和4年度学校による博物館利用の実績報告
 - ②令和4年度博学連携委員会の活動実績の報告
 - ③令和5年度の研究について
 - ・オンライン授業の改善。
 - ・オンラインを活用した「学び合い」授業の研究。
 - ・「教師のための博物館利用ガイド」の作成。
- ※ 閉会后、常設展示見学。教材として活用可能な資料の展示状況を見学。

【第2回博学委員会】

実施日 令和5年9月20日(水) 午後3時30分から

会場 入間市博物館会議室

〈出席者〉各委員及び梅津あづさ副主幹

概要 ○報告・協議 の提案について

- ①オンライン授業案の検討。社会で扱う。
- ②授業の計画
 - 2月上旬3年生社会「市のうつりかわり」
 - 2月中旬4年生社会「きょう土の伝統・文化と先人たち」

【第3回博学委員会】(予定)

実施日 令和5年2月下旬～3月上旬 午後3時30分から

会場 入間市博物館会議室

〈出席者〉各委員及び梅津あづき副主幹

概要 今年度の活動内容と来年度の方向性について

2 令和5年度 活用授業実績(予定を含む)

1 学期

No	実施期日	曜	午前 午後	学校名	学 年	学 級 数	児童生徒数 (人)	引 率 者 数 (人)	学習内容	市バス (台)
1	4月21日	金	午前	藤沢北小	3	3	105	5	科学室・講座室・茶の世界	—
2	4月26日	水	午前	藤沢小	6	2	71	2	自然・歴史(オンライン)	—
3	5月10日	水	午前	藤沢東小	6	3	88	3	自然・歴史(オンライン)	—
4	5月11日	木	午前	東金子中	1	3	89	7	茶席体験・歴史・茶の世界	3
5	5月17日	火	午前	豊岡小	6	2	53	2	自然・歴史(オンライン)	—
6	5月17日	水	午後	西武中	1	1	38	4	茶席体験・茶の世界	1
7	5月19日	金	午前	金子小	6	2	49	2	自然・歴史(オンライン)	—
8	5月30日	火	午前	豊岡中	1	3	94	6	茶席体験・歴史・茶の世界	3
9	5月31日	水	午前	東金子小	6	2	45	2	自然・歴史(オンライン)	—
10	6月2日	金	午前	藤沢東小	3	3	91	4	科学・自然・講座室	—
11	6月6日	火	午前	西武小	6	3	111	3	自然・歴史(オンライン)	—
12	6月7日	水	午前	狭山小	3	2	69	4	茶の世界・講座室	徒歩
13	6月8日	木	午前	金子中	1	2	60	6	茶席体験・歴史・茶の世界	2
14	6月9日	金	午前	東町中	1	2	67	3	茶席体験・歴史・茶の世界	2
15	6月13日	火	全日	藤沢中	1	6	198	11	茶席体験・歴史・茶の世界	3
16	6月14日	水	午前	藤沢南小	6	2	61	2	自然・歴史(オンライン)	—
17	6月15日	木	午前	狭山小	6	2	65	2	自然・歴史(オンライン)	—
18	6月22日	木	午後	野田中	1	3	104	5	茶席体験・歴史・茶の世界	3
19	6月23日	金	午前	藤沢北小	6	3	107	3	自然・歴史(オンライン)	—
20	6月28日	水	全日	上藤沢中	1	4	116	5	茶席体験・歴史・茶の世界	2
21	6月29日	木	午前	宮寺小	6	1	32	1	自然・歴史(オンライン)	—
22	6月30日	金	午後	武蔵中	1	3	97	3	茶席体験・歴史・茶の世界	徒歩
23	7月4日	火	午前	新久小	6	1	29	1	自然・歴史(オンライン)	—
24	7月5日	水	午前	扇小	6	4	114	4	自然・歴史(オンライン)	—
25	7月6日	木	午前	高倉小	6	2	45	2	自然・歴史(オンライン)	—
26	7月7日	金	午前	東町小	6	2	69	2	自然・歴史(オンライン)	—

2 学期

No	実施期日	曜	午前 午後	学校名	学 年	学 級 数	児童生徒数 (人)	引 率 者 数 (人)	学習内容	市バス (台)
1	9月6日	水	午前	黒須中	1	3	79	6	茶席体験・歴史・茶の世界	2
2	9月7日	木	午前	黒須小	6	2	62	2	自然・歴史(オンライン)	—
3	9月12日	火	午前	仏子小	6	2	44	2	自然・歴史(オンライン)	—
4	9月15日	金	午前	金子小	3	2	53	4	茶の世界・講座室	—
5	9月15日	金	午前	県立ひまわり特支高	1	2	7	4	茶席体験・茶の世界	—
6	9月22日	金	午前	越谷市立川柳小	4	4	129	7	自然・歴史・茶の世界・講座室	—
7	10月19日	木	午後	西東京市立東小	5	2	76	6	科学・自然・茶の世界	—
8	10月25日	水	午前	藤沢小	3	2	49	4	科学・自然・茶の世界	—
9	10月26日	木	午前	日高市立高根小	3	1	27	5	自然・茶の世界・講座室	—
10	11月10日	金	午前	越谷市立瑞木小	4	2	57	4	自然・茶の世界・講座室	—
11	11月15日	水	午前	三郷市立高洲小	4	1	29	4	科学・自然・茶の世界	—
12	11月21日	火	午前	三郷市立桜小	4	2	41	5	自然・茶の世界・講座室	—
13	11月21日	火	午後	瑞穂町立第五小	3	1	26	3	煎茶体験・茶の世界	—
14	11月29日	水	全日	向原中	1	4	161	7	歴史・茶の世界・茶席体験	2
15	12月12日	火	午前	日高市立高麗川小	3	4	140	6	自然・歴史・茶の世界・講座室	—

3 学期 (予定を含む)

No	実施期日	曜	午前 午後	学校名	学 年	学 級 数	児童生徒数 (人)	引 率 者 数 (人)	学習内容	市バス (台)
1	1月12日	金	午前	藤沢小	3	3	51	4	入間の歴史・道具展見学・体験	2
2	1月16日	火	午前	仏子小	3	2	49	3	入間の歴史・道具展見学・体験	2
3	1月16日	火	午後	瑞穂市立第四小	3	2	54	6	入間の歴史・道具展見学・体験	—
4	1月17日	水	午前	狭山小	3	3	71	3	入間の歴史・道具展見学・体験	徒歩
5	1月18日	木	午前	豊岡小	3	2	65	3	入間の歴史・道具展見学・体験	2
6	1月19日	金	午前	高倉小	3	1	34	3	入間の歴史・道具展見学・体験	1
7	1月24日	水	午前	宮寺小	3	1	36	2	入間の歴史・道具展見学・体験	1
8	1月24日	水	午後	三郷市立後谷小	4	1	30	3	自然・茶の世界・講座室	—
9	1月25日	木	午前	藤沢東小	3	3	94	3	入間の歴史・道具展見学・体験	2
10	1月26日	金	午前	金子小	3	2	53	3	入間の歴史・道具展見学・体験	2
11	1月30日	火	午前	西武小	3	3	98	5	入間の歴史・道具展見学・体験	3
12	1月31日	水	午前	東金子小	3	2	43	3	入間の歴史・道具展見学・体験	1
13	2月1日	木	午前	藤沢北小	3	3	107	4	入間の歴史・道具展見学・体験	3
14	2月2日	金	午前	藤沢南小	3	2	71	3	入間の歴史・道具展見学・体験	2
15	2月6日	火	午前	扇小	3	4	141	4	入間の歴史・道具展見学・体験	4
16	2月6日	火	午後	瑞穂町立第二小	3	2	41	3	入間の歴史・道具展見学・体験	—
17	2月7日	水	午前	黒須小	3	3	86	4	入間の歴史・道具展見学・体験	2

18	2月8日	木	午前	新久小	3	1	36	2	入間の歴史・道具展見学・体験	1	
19	2月9日	金	午前	東町小	3	2	60	3	入間の歴史・道具展見学・体験	2	
20	2月16日	金	午前	川口市立新郷南小	4	2	50	3	自然・茶の世界・講座室	—	
	2月21日	水	午前	黒須(特支)		1	8	3	自然・歴史・茶の世界	—	
計					62校	—	—	4325	233	—	53

3 令和5年度 学校支援講座開催実績

No	日時・講師(学芸員)	学校・学年・教科等	内容
1	5月9日(火) 梅津あづさ	金子小学校・第3学年・社会科	「お茶博士になろう」
2	5月26日(金) 梅津あづさ	仏子小学校・第3学年・社会科	「お茶博士になろう」
3	7月5日(水) 梅津あづさ	所沢市立美原小学校 第3学年・社会科	「お茶博士になろう」
4	9月21日(木) 梅津あづさ	扇小学校・第3学年・社会科	「ちいちゃんの時代のくらし」
5	10月6日(金) 小田部家秀	高倉小学校・第6学年・社会科	「お寺の建物のしくみ～重要文化財で学ぶ歴史～」
6	11月16日(木) 小田部家秀	藤沢北小学校・第6学年・理科	「入間市の坂と段差はなぜできた?～写真と図で見る地形散歩～」
7	11月22日(水) 小田部家秀	藤沢北南学校・第6学年・理科	「入間市の坂と段差はなぜできた?～写真と図で見る地形散歩～」
8	12月5日(火) 小田部家秀	野田中学校・第1学年・総合	「入間市の坂と段差はなぜできた?～写真と図で見る地形散歩～」

4 終わりに

博物館には、毎年市内外の小・中学校等の多くの児童・生徒が来館し、青丘庵での茶席体験をはじめ様々な体験や見学・観察を通して、学校教育の充実に向けて活用していただいています。博物館では、学校との綿密な事前授業打合せを行い、社会、理科、総合的な学習の時間、学校行事等の教育課程に合わせて、授業活用案を作成して有意義な学習になるように工夫をしています。

今年度の入間市博物館・学校連携事業研究委員会では、博物館を活用したオンライン授業について研究してきました。また、入間市教育委員会が進めている「学び合い」の授業に挑戦しました。今後は、各学校の教育課程・各教科・単元、その地域に合わせた博物館授業ができるように、出前授業やオンライン授業を含めた博物館授業を充実させていきたいと考えています。

令和5年度 入間市博物館・学校連携事業研究委員会

委員長	藤沢中学校	校長	山田 亮太
副委員長	東金子小学校	教諭	山本かすみ
委員	金子小学校	教諭	戸口裕太郎
//	野田中学校	教諭	相羽 崇史
//	金子中学校	教諭	鹿山 良寛
//	入間市博物館	指導主事	栗原 淳
//	入間市博物館	副主幹	小田部家秀
事務局	入間市博物館	館長	澤田 和也
//	入間市博物館	主幹	津久井浩一
//	入間市博物館	副主幹	梅津あづさ